



ヨルバ旅行記

アフリカはナイジェリア南部、首都レゴス一帯をヨルバ族の住むヨルバランドという。そこへアフロ・ミュージックの創始者フェラ・クテイを見に行こうと思った。ところが、なかなか情報が集まらない。ビザを取りに行つたナイジェリア大使館でさえ「もう何年も本国からの情報は一切入って来ていません」と言う。すぎる思いで。パソコン通信に情報を求めると、しばらくして以下のようなメールが届いた。

1 X X X X

CXJ\*\*\*\*\*

95/05/13 23:58

題名： RE: ナイジェリアについて

三浦さん、こんにちは。 ナイジェリアに行きたいそうで・・・

実は今日私はそのナイジェリアから戻ってきました。観光ではなく出張で、ポートハーコート（ニジェール川の河口、奴隷海岸と呼ばれていた場所）という所に8ヶ月滞在しました。

はっきり言って、ナイジェリアは日本人が観光で行く場所ではないと思います。国民全員が泥棒に見えてきます。その実態はラゴス空港に着いたときから実感できるでしょう。訳のわからないやつがたくさん寄ってきて、パスポートコントロールを手伝ってやると言ってパスポートを持っていくわ、金をせびるわ、税関では必ず荷物をオープンさせられ、これは何だ、何に使うのか、合計いくらだと言ってきます。断ると別室に連れていかれる事もあり危険な目に遭う可能性もあります。出国のときは手荷物を開けられる場所が4ヶ所くらいあります。逆に言えば金が全てを解決するというとも言えます。

街中も同じシステムと言っていいでしょう。昼間は少なかった警官やM16を担いだアーミーが夜になり涼しくなると大勢出てきて、車を止め検問を行います。もし白人が乗っていたりすると金をせびります。タクシーも言い値ですので黙っていると、ぼったくられます。

警官もアーミーも政府も基本的に同じ人種なので自分のみが正義です。自分の事は自分で責任を取れということはそういう事です。

欧米の航空会社は夕方にラゴスに到着し、その日の23時前後に自国への帰路に就きます。この意味がわかるでしょうか。

今年、サッカーのユース大会が予定され、衛生面の問題で中止されましたが、あれは単なる表向きの理由だと私は思っています。ナイジェリアはご存じの通り、赤道に近くに位置し高温多湿で、マラリア、腸チフス、コレラなどの日本では隔離される伝染病はあちらでは日本の風邪のような扱いの病気であり、常に流行しているといっても過言ではないと思います。実際私もマラリアには5回かかりました。しかし、こんなことは今に始まったことではなく欧米は承知していたと思いますので、ナイジェリア政府が批評した通り、政治的または差別的なものがはたらいたと思います。

簡単かつ主観的にナイジェリアの概要を述べました。

三浦さんがこれまでどのような国に行き、何を見てこられたか、またそのナイジェリアにある何かを見たいという信念の度を私は存じあげませんので、えらそうな事はいえませんが、もし行かれるのであれば下記も参考ください。

日本に乗り入れしているヨーロッパ系の航空会社であれば、だいたい週に3、4日はラゴスに便があります。特にBAは毎日あります。

アフリカなので黄熱病の予防注射は必須。マラリアの予防薬は日本出発の際に飲んでおくこと。現地到着後に現地の予防薬を購入し定期的に飲むこと。

帰国後もしばらく飲み続けること。

現地通貨はNAIRA。今年初めは1\$ = 20ナ行でしたが、現在は1\$ = 80 NAIRAに変更。固定相場制。もちろんブラックマーケット有。外国人はナイラからドル等にチェンジできない。

これから10月くらいまで雨季。少し涼しい。病気発生しやすいので気をつけること。

以上ですが、もし他に何かありましたら知っている限りのことはお答えします

のでメールください。あくまで主観ですが。

CXJ\*\*\*\*\* ☆\*\*\*\*\*☆ でした

メールでお礼の言葉といくつかの質問を送ったけれど、結局、返事はなかった。

# ヨルバランド旅行記

一九九五年 八月二十三日（水曜）

午前四時 起床

早朝にも関わらず、待たずにタクシーが捕まったので、予定より早く上野駅に着く。

午前六時 上野

早く着いたので予約しておいた始発のスカイライナーまで、ずいぶん間がある。始発前で構内に冷房が入っていないためクソ熱い。夜通し遊んでいた若い子達が数人、京成線ホームへ向かう。疲れを知らず盛り上がっている様子に「日本」を感じて、いとおしくなる。

午前八時 成田空港チェックイン

キャセイ・パシフィック航空のカウンター前で三〇分待つ。インド人の三人組の後、四番目にチェックインしたのに並び席が取れず。団体予約が既に入っていて、席は殆ど虫食いに少しずつ残っているだけだという。シンヤ、スタートから不安になる。不安を怒りに変えて、カウンターのお姉ちゃんにカラんでいる。

搭乗待合室のシートが禁煙のため上のラウンジにへ行ってみたら「ビジネス以上のエアチケットが無いと利用出来ない」と断られる。「同じ空港税払ってるんだぞ」と遠くから一頻り吠える。コーヒーを一階で買い、二階の片隅の箱庭のような喫煙スペースへと運ぶ。階段や絨毯にシコタマ零したが「反省する気しないよね」と免税店で買った煙草をふかし時間を潰す。

午前一〇時 搭乗

午後一時四〇分 香港着（フライト時間四時間四〇分）

午後二時五〇分 香港発

午後一時 ボンベイ着（フライト時間七時間四〇分）

空港のトラベルサービスのオヤジに、日本の旅行代理店に教えられたセントールホテルのリムジンバスの発着場所を聞くと、「バスは一時間に一本しかない」という。しつこく別のホテルを奨めるので、「セントールホテルのリムジンバスが出てしまった後だったら、またここに戻ってきて、あなたの世話になる」といったら、「その頃俺は営業時間を終了して、もういない」という。



しまった！私達は入国審査を列の最後に受けて、インド通貨（ルピー）の両替に手間取り、ここでまた時間をくってしまった。バスが出てしまった可能性は高い。一時間待っても飛行機の発着が無い時、バスは来ないかもしれない。かといって空港の外の雲助を利用するのは危険だ。さつき出口の途中まで行ってみたとき、ゾンビのように群がってガラスにはりつき、餌食（私達）を待っているのを見てきたのだ。悩む私達にオヤジはついにセントールホテルに電話をかけてくれた。が「迎えにきてくれないか」と頼むと「そういうサービスはやってない」と無愛想に切られてしまった。

オヤジが「KINGSホテルは良いホテルだ。バスもそこに待っている」といつている横に四角い穴が空いていて、そこから黒い顔が「早く餌をくれ」とのぞいている。バスのドライバーだという。悪い頭を二個絞っても良い答は見つからず、「もしKINGSホテルが気に入らなかつたらセントールホテルまで送る」という条件でオヤジの世話になることにした。一泊五〇〇〇円のKINGSホテルに泊れば、ここで一万円浮かすことができる。

ドライバーは客は私達だけだといっていたのに、バスと呼ばれた（汚い）タウンエースにはすでに四人のインド人が乗っている。暗闇で黒い顔が「ハロー、ハーアニュー」といった。いざとなればコッチは男二人だ、ドライバーの首締めてでもセントールへ向かわせてやる。と思っていた気持ちが冷たくなる。一〇分で到着するはずのKINGSホテルは二五分たつても着かない。さつきまで「もうちよつとで着きます」といつていたドライバーは「何時に着くかなど分からない」と言い出した。

私にとって五年ぶりのインドは何も変わってなく、むせるような臭いで不思議にワクワクした気持ちを押さえられないのだが、信号で寄ってくる乞食や少女、それを無気味に黄色く照らす街灯で、シンヤは緊張している様子。バスが国道を離れ、暗い道に入った所でシンヤはパスポートを秘密のポケットに移した。それは昨日シヤツの背中の裏側に、文字どおり「母さんが

夜なべをして」制作したものだ。「あんたは？」と聞かれたが「パスポートで許してもらえればラッキーじゃん」。それからもバスは広い道と暗い道を何度も通ってKINGSホテルに到着した。奇跡のような気がした。

決して新しい建物ではないが、どうせ四時間程度の宿だ。エレベータはドアが鉄の網になった昔の欧州の映画のような作りで、網の向こうに大声で叫ぶと運転手（狭いエレベータに椅子を置いて座っている）によってエレベータが運ばれる仕掛けだ。

「フレッシュ・ライム・ソーダ、ウイズ、ノーアイス」とルームサービスで頼んだら、「スイート？」と聞かれる。懐かしいフレーズだ。もっとゆつくりしたくなる。私にとってインドは（デリーやボンベイでさえも）巨大な田舎だ。

八月二十四日（木曜）

午前四時三〇分 起床

さすがに昨日は疲れたらしく、爆睡した。そのせいでシンヤは私のイビキによって眠れなかったらしい。男はタフでなければ生きていけない。午前五時、ホテル出発。

午前六時 ボンベイ空港着 エチオピア航空にチェックイン

出国審査を終えて搭乗ゲートへ向かうと空港職員の制服を着た男が「ホラホラさっさとこのエレベータに乗れ」といわれ乗る。降りたらチップを払えと言われる。それは反則だろう。搭乗時間までバーでコーヒーを飲んでいたら、掃除のお婆さんが私達の回りをいつまでもウロウロと掃いている。これは反則では無い。わずかに残ったルピーでシンヤはチップの渡し方を練習する。

午前八時 搭乗

ボンベイからエチオピアまでの飛行機は3×2席の小さなもの。隣のアフリカ人のオバチャンが風邪でグシャグシャと咳が止まらない。それに加えて機内は非常に乾燥している。大口を開けて眠っていたらシンヤに起こされた。「今、風邪ひかれちゃ困る」という。

ずうっと続いていた海が終わって陸地に入った。「やった！アフリカ大陸だっ」間違えでは無かったのだが、そこはソマリアらしい。少し気持が曇る。うちの愛猫「びけお」の名前はその頃騒がれていた「ソマリアPKO」からとったんだ。「正義」に見放された国。

午前一一時三〇分 エチオピア着（フライト時間五時間五分）

タラップを降りて感動した。空気があまりにも美味い。口や肺ではなく、身体全体が美味しくて感動している。飛行機から見ていたら草原にポツンと空港があった。高原のこの大地をボブ・マーレーは夢みたのか。空港からは何処までも続く緑が見えるだけで、遠くに山（というか丘）が霞んでいる。

エチオピアで出国しないトランジット客は二階へ上がり、乗り換え飛行機の手続きをしなくてはならない。これがスピード違反の取り締まりの時に警察が道端に出しているような小さな機でオヤジがたったの二人で処理している。当然回りは人だかりで、ごった返している。これが本当に航空カウンターなのか確かめようと近づいたが弾き飛ばされ、諦めて荷物を持たせておいたシンヤの所へ戻ると、彼はフィリピン人に話し掛けられて困っていた。フィリピン人もまた私達と同じく航空カウンターを探していた。残念だけれど力になれない。しばらくして人だかりが無くなると私達はそこで搭乗の手続きをすることが出来た。フィリピン人が気になって一階の入国審査で並んでいる列を階段の上から探したら、そこに泣きそうな顔で私を見上げる彼の姿があった。手招きしてやると小犬のように走ってやってきた。

彼はアクラの日本料理店へコックとして働きに行くところだという。彼の名前を聞くと「シミズ・カジマ」だという。昔、テレビで見た「ダム建設会社の名前を子供に付けるほど我社は現地で感謝されている」という偽善的なCMを思い出して嫌な気分になったが、後でそれは彼が働きに行く店の名前だと分かる。本当に日本料理店かいな。

二時間後の搭乗を待つ椅子でシンヤが「クソをしたい」と言っていたにも関わらず、なかなか便所に行こうとしない。見ると巨大で黒いアフリカ人がゾロゾロ便所に入っていく。

「あんなのが入っていくから恐いの？」 「うん」

見るとアフリカ人がゾロゾロ便所から出ていく。

「あんなのが出てくるから恐いの？」 「うん」

いよいよ回りはアフリカ人ばかりになってきた。

小便を兼ねて偵察に行くと、鍵が壊れてなくて水が流れる、という二つの条件を同時に満たす所が無くシンヤはクソを断念する。

美しいボブ・マーレーの聖地を後に、危険なフェラ・クティのレゴスへ向かう。気が重くなる。

午後一時一〇分 エチオピア発

午後四時二五分 レゴス着（フライト時間五間一五分）

いよいよ、恐怖のレゴス空港だ。何ヶ月か前のCBSニュースで特集された、入国審査官が公然とワイロを請求する乱暴な関所。CCDカメラを隠したレポーターは八〇〇ドルを請求されていた。ただし、別の本では空港内部にまで旅行代理店関係者が入り込めるようになっていて入国手続きを手伝ってくれる、といった情報もあるにはあった。

胃の辺りがモゾモゾする程、緊張しながら飛行機を降りると紙切れに私達の名前を書いた男がいる。「やった！こいつが入国審査を助けてくれるんだ。持つべきものは旅行代理店だ」と喜び、その名前が確かに私達であることを告げると彼は私達を入国審査待ちの列の一つに並ばせて何処かに消えてしまった。「あれ？」という間に入国審査になる。「旅行会社の男

が選んだのだから、きつとこの列の入国審査官は比較的良心的なんだよ」などと、楽観的な話で自らの緊張を和らげてみたが、やはり私達は理由も聞かされず止められ待たされる。ひとしきり、黒い肌の人達を通した後でゆっくりと料理して頂けるらしい。全ての人達が去り、ビジネスらしい白人三人組と日本人二人が残された。

「オマエはナイジェリアに初めて入国するのだから簡単には通れない。何か質問はあるか？」

「いいえ」（質問はそっちの仕事だろうが）

軍事政権下のアーミーの契りのようなものだろうか、彼等の顔には明らかに人為的な切り傷が何本か頬一杯に刻まれている。

「渡航の目的は何だ」

「観光です（入国カードに書いてあるだろうが）オシユン・フェステイバルを見る予定だったのですが・・・」オシユン・フェステイバルは先週で終わっている。無駄な言い訳を避けるため、一枚のFAXを手渡した。そのFAXはレゴスの旅行代理店、ドルフィン・トラベルが私達に送ったもので、オシユン・フェステイバルが当初の予定を変更して一週間早まってしまったことが報告されていた。入国審査官はたつぷり時間をかけてそれを読んでいる。白人はこの関所をもう、とつくに通過して行つた。審査官はようやく読み終わり、そして言った。

「オシユン・フェステイバルはもう終わっている」（読みや、すぐ分かるだろうが）

「仕事の都合でスケジュールを変更出来なかつたのです。でも、この旅行会社の人が先程、私達を迎えに来てました」

彼は再びFAXを眺めた後、旅行会社のスタッフを場内アナウンスで呼び出すことにした。しめた。こうなれば現地スタッフは私達をきつと巧く助けだしてくれるだろう。彼等はこの道のプロなのだから。それにしてもFAXを用意しておいて良

かった。ドルフィン・トラベルとのFAXによるやり取りは何枚あったのだが、フェラ・クティの名前が出ていない物は一枚しか無かったので、予め選んで持っていたのだ。こんな所でフェラ・クティを見に来たなんて言えない。彼は現在も続く軍政府に、家を焼かれ母を殺され妻をレイプされ、何度も逮捕されるほど憎まれているのだから。ところが。

アナウンスの末、呼び出された先程の男は入国審査カウンターの内側まで（私達を迎えに）入ってきたことを責められている。しまいには「オレは外のドルフィン・トラベルの連中に頼まれただけだ」とか言って別のFAXを審査官に手渡ししている。恐らく、私達が彼を信用するようにとドルフィンの社員から渡されたのであろうそのFAXは私が日本からドルフィンへ送ったものだ。その内容はドルフィンから届いたフェスティバルの日程変更の知らせに対して、「スケジュールは変えられない。フェスティバルが見られないのは残念だが、旅の目的はフェラ・クティを見ることなのだから構わない」と応えたものだった。しかも、“1st priority”だの“main purpose”だの少ない語彙の限りを尽くしてフェラ・クティをくり返し強調している。審査官は今度も、目が眩むほど長い時間を掛けて私の書いたFAXを読んでいる。読み終わるとFAXを別の審査官に渡し、私達がドルフィンの社員と間違えた男を詰問してる。渡された審査官もやがてそれを別の審査官に渡し……。やがて男は審査官に囲まれ遠くへ連れていかれてしまった。その間、何人もの審査官が私達に攻め寄る。

「ウォークマンは持っていないのか？」 「私はライブミュージックしか聞かない。レコーディングされたものに興味は無い」と答える。（本当は持ってるけど）

「パソコンは持っていないのか」 「無い」 （そんなもん、こんな国に持ってくるかつ）

「米ドルは持っていないのか」 「ドルフィン・トラベルが現金は一切持ってくるな、っていうから一銭も持ってきてない。全部TCDだ」（そんな旅行者いるわけ無い）

「オフィサーにギフトも持たずに来たのか？」 「何か必要なのでしょうか？」 (スツとぼける)

しばらくして、先程の男がそれを促したのであるう、ホンモノの旅行会社社員がやって来た。ワイロを脅し取るため重々しく保たれた複数の審査官の顔が並ぶ緊迫した空気の所に、ヘラヘラ笑いながら片手を上げて「ハイ」とミスター・ババは入ってきた。彼は場違いな笑顔で私達に「Nice to meet you」といつて握手した後、私に顔を近づけて「私にいくらかくれれば、この問題を全て解決してやるぞ」といつて、私のアゴを撫でる。神も仏もありやしない。キリストもアラームもブツタもこの大陸の人ではないけど。開き直って「この入国審査官はここをパスするために金を出せっていうんだ。どうしても必要なことなのか？ドルフィンは現金を持ってくるなっていうたよな」と声のトーンを上げて聞いてみたらババは少し曖昧な表情で答えない。

散々の取り留めの無いやり取りの後突然、パスポートが返され「行って良い」と言われる。喜んで立ち去ろうとすると、そのパスに挟んであったはずのイエローカードとエアチケットが無いことにシンヤが気付き、指摘するとアツサリ返してくれた。さつきまで威圧することが仕事、といった顔をしていた連中がヘラヘラ笑いながら道を開け見送っている。

やれやれ、次は税関だ。ババは「じゃ、外で待っているから」と出ていつてしまう。(まただ) もう、とつくに人気が無くなった何個かある税関の一つに数人が集まり、私達を待ち受けているのが遠くからでも見える。税関はもつと緊張しなければならぬ。なぜなら私達は靴の底に闇両替を利用するための一、六〇〇ドルの現金を隠し持っているからだ。

二人分の荷物を詰め込んだ大きな靴の中を三人の男が開けて調べる。特に真ん中のフレイヴァー・フレイヴ似の男は特に念入りに香取線香やそれを置く皿、洗面具やパンツの一枚いちまいを広げてみて、いちいち「これは何だ？」と大威張りで聞いてくる。カセットテープのパッケージを指でガリガリと猿のように破いている。彼の念入りさは困ったことに一、六〇〇ドル



が眠る大荷物の底に来てても衰えることを知らなかった。裏に米ドルが貼り付けてある鞆の底を叩いて「これは何だ？」と聞く。「底だよ」と何気なく答えつつ、背中のデイバッグを下ろしてフレイヴの隣の男に自主的に開けて見せる。フレイヴはガリガリと爪で底板の端を引っ掻き、取り外そうと試みている。

日本出発の前夜、シンヤは自分の分の隠し金八〇〇ドルの隠し場所に困ってパニックに陥った。私はズボンのベルト穴の裏に秘密のポケットをゆかに作ってもらい安心していったのだが、シンヤの話を聞いているうちにパニックが伝染ってきた。確かに五〇ドルで揃えた八〇〇ドルは嵩張って目立つかもしれない。靴下の裏も洗面道具の中も、思い付くものは全て、いかにも、な感じがする。(実際、それらは念入りに調べられた。) 結局シンヤは母がシャツの背中に作った秘密のポケットを、私はズボンのベルト通しの裏のポケットを使わず、二人の金は一緒にして、鞆の底板の裏に貼りつけ、底板は両面テープで貼り付けることにした。その夜、シンヤとゆかと私はアジトに戻った盗賊のような作業を終えてから、お好み焼きを食べに出掛けた。

私のデイバッグに着けてあるミニひょうたんを見て、後から野次馬のようにやって来た男が「何だ、それは？」と聞く。よくぞ聞いてくれました、とばかりに「日本のお守りです。この旅行の安全を祈ってお爺さんが私にくれました」と美しいウソをつけて同情を買おうとしたら、男は急に怒って「日本の神様をナイジェリアに連れてくるなっ」と吐き捨てるように言い、近くのドアから外へ出ていってしまう。あわわ。

デイバッグからカメラやウォークマンが出てくると検査員の目つきも変わり、野次馬の女性係員も身を乗り出してくる。シンヤもセカンドバッグの中を開け、別の男を引き付けている。こうなるとフレイディは遊びに飽きた子供のように散らかった鞆を放り出して、私のデイバッグを引き寄せ、中身を漁り出す。「しよーがねーなー」という顔で大きい方のバッグを仕舞い始

めると別の男がそれを手伝ってくれた。デイバッグを途中まで漁ると、またしても突然「OK」といって急に皆で鞆の整理を手伝ってくれ、いい人達に変身する。入国審査もそうで、笑顔さえ浮かべて見送ってくれる。まるで今までの行為をひっくり返して「なーんちゃって」とオチをつけているみたいだ。

先程の男が出ていったドアを開けるとドルフィンスタッフが数人大騒ぎで迎えてくれ、あつという間に荷物と私達を車に詰め込み、逃げるように空港を遠ざかった。茫然としている私達に助手席から振り返りババが「ウエルカム・トウ・ナイジェリア！」とでかい声で繰り返して、「ジュジュ・ミュージックだ！」とラジオのポリウムを上げて大声で歌う。シンヤのシヨートホープを立て続けに二本吸った。

さあ、フェラ・クティよ。私達はリスクの海を越えてヨルバの国へやって来た。今度はアナタが私達にシヨウを見せる番だ。

八月二十五日（金曜）

午前八時 起床

一晩二〇〇ドルのシエラトンには快適で泥のように眠り、旅の疲れを癒すことは出来たが、身分不相応なのは分かっている。より安い宿、エアポート・ホテルに移るため午前九時にシエラトンを出る。チェックアウトは十二時なのでエアポート・ホテルに無事チェックインできたら、改めてチェックアウトをしに来る予定だ。

エアポート・ホテルは三日で五四〇ドル（半分はデポジット、つまり預かり金）。ツインであることを考えれば手頃な値段だ。TCで払おうとしたら、ババが「レートが悪いので他でナイラを作ってこよう」という。政府が定めたレート、一ドル〇八〇ナイラに対して、一ドル〇七〇ナイラだった。ところが近くの両替屋は六五ナイラ。戻ってやはりTCでホテルに支払おうとしたところ、シンヤのサインが信用できないと断られる。シンヤは日本語でサインしたため彼等には照合できないらしいのだ。そんなこと言っただけでサインはもうしてしまった。いきなり五四〇ドルもの無駄な損害は避けたい。

せめてTCに書き込まれた今日の日付がウソにならないうちに、とシエラトンへ戻り両替を頼む。私がシエラトンの売店でレゴスの地図を買って戻ると、シンヤはメモ用紙に漢字の書き取りのように沢山のサインをさせられている。が、イマイチ信用してもらえない。三〇分程のやり取りの後、階上の部屋へ通される。偉い人に「始めまして」と丁寧に挨拶して、アメックスのオフィスに電話したりしたが結局サインは認められない。そうこうする内に十二時のチェックアウトの時間になってしまった。数分前まで客だった黄色人の顔が今はカボチャに変わっちゃったんだろう。「うち（シエラトン）は宿泊客の両替しませんが」といわれれば引き下がるより他無い。

次は超渋滞のレゴスの中心部にあるアメックスのオフィスへ。アメックスのTCの日本語の説明書を見せて、「ここに、サインは日本語でするのが望ましい、と書かれているじゃないか」と言ってみたがやはりダメ。

ここでババは一つのアイデアを提案した。まず、TCの二〇ドルを数枚、銀行で両替する。これにサインをして渡す時、問題のサインをしてしまった一〇〇ドルTCを二枚だけ混ぜる、というのだ。いいアイデアだが本当に大丈夫だろうか？。しかし、心配は要らなかった。私達は何軒かの銀行を訪ねたが、結局TCを両替してくれる銀行を見つけることは出来なかったのだ。

結局、ドルフィンのおフィスへ行き、女社長のバデボから四万五千ナイラを借りてエアポート・ホテル三日分の料金を払うことにした。(ただし、半分はデポジットなのでチェックアウト時に戻ってくる。)話がまとまり、飯を食いに行く。私が子供のころに遊んだ東京湾のような、汚染されたレゴスの海に臨むレストラン。

飯を食いながらババは「ビジネスをしよう。俺はドルフィンを辞めたい、俺は頭が良い、一緒に儲けよう」と鼻息が荒い。が、具体的なプランも、為替に対する理解も、無いに等しい。あつても何かを運ぶ類いの仕事だろう。それでも、そのエネルギーだけは羨ましい。エアポートホテルに行く途中、ババは恋人を車に乗せた。仕事を終えて帰宅する彼女を私達のついでに送るつもりらしい。彼等の関係は悪化しているらしく、助手席に乗った彼女をババが後座席から甘い言葉や真剣な言い訳で、ご機嫌をとっている。時々、シラケ顔の私達を気遣ってか「マサト、俺は将来ビッグマンになっても、嫁さんはこの娘、一人と決めてるんだ」などと話かける。しかし、話がよりシリアスになるとババは助手席に乗り出して、後部座席の真ん中に座っているシンヤの膝に腰掛けてしまった。この男は昨晚、シェラトンの私達の部屋で両手をへその前に合わせて「貴方は私のご主人さまですから、なんなりとお申しつけ下さい」といって私を恐縮させたのだ。「まーそー固くなるな、フレンドリーに行こうぜ」の一言が失敗だったのか？

とんだレゴス市内観光を終えてホテルにチェックインしたのは午後七時だ。ババが迎えに来るまで東の間の睡眠を取る。なにしろ彼のステージは深夜から朝まで続くのだ。いよいよ、やっとこれでフェラが見れる！

ドルフィン的女社長、バデボが私達がジジュ・ミュージックが好きだと聞いて、フェラの前にキング・サニー・アデも見れるように手配してくれたのだが、ババは私達の予想より二時間程度遅れてやって来た。途中でドルフィンが用心棒に雇ったラディを拾ってサニー・アデが演奏する場所へ。

彼はある大金持ちの主催するパーティに呼ばれて、その邸宅の庭で演奏していた。道路にはサニー・アデの演奏を聞くために人が集まっていたが、ステージは道路を背にして庭の主賓席に面して設置されている。招待客以外の人達はステージの横を最前列にして道路へと溢れている。ババは人波をかき分け私達をその最前列へ連れていった。当然、大ヒンシュクなのだが「まあ、いいや」と落ち着きかける間もなく警察がやってきた。先程かき分けた人の一人を「何度、出ていけ」といったら分かるんだ」というようなことを叫び、襟首を持って乱暴に道路へ引きずり出した。私達もソクサと逃げ出すとババが警察に捕まった。周囲の注目を浴びながら盛んに何か弁解しているが、私達は近寄らず、離れて自動車のかげから様子をうかがう。しばらくするとババは見知らぬ男と戻ってきて「彼について行け」と私に指示する。何だか分からないがババと別れ、男についていくとステージの袖を通り、あっさりステージの正面に出ることができた。つまり、ババはアドミッションを懐に入れるために私達をヤジウマ席へとご案内したのである。やむをえず、私達の分は払ったが、せめて自分の分は節約ってわけだ。庭は明るく楽しそうで、ステージ裏とは別世界のようなのだ。ステージにこった返す人々でサニー・アデの姿は見えないが、音は良好で先程の男はビールを持って来てくれた。私の後ろに立てられたテントの下では金持ちの親戚らしきオバさん達が行儀良く座っている。シンヤは離れた所で陽気なオヤジと踊っている。「これがナイジェリアの上流階級のパーティか」と楽しんでいると、間もなく演奏は終わってしまい、人がステージからゾロゾロ降りて来た。一瞬、サニー・アデの姿を見ることができた。私達はいつの間にかやって来たババに促されてその場から逃げるように立ち去った。シンヤに「楽しそうだったじゃん」と聞くと「なつかれて困ったよ。あのオヤジ、ホモかと思って」。確かに妙な腰つきで擦り寄られているようだった。

サニー・アデは超有名なジュジュ・ミュージックの王様だけれど、正直言って早くフェラ・クティを見るためシュラインへ行きかけた。シュラインは「お寺」ではなく、彼のお店の名前。彼が一時過ぎにならないとステージに上がらないことは知っていたが、十時頃からエジプト80（フェラ・クティのバンド）による演奏は始まっていると聞いている。この間にCD

化された（つまり私の知っている）曲を聞けるはずなのだ。（フェラ・クティはCD化した曲はステージではやらない。）それはそれで大いに楽しみだ。

ようやく車を走らせたと思ったら、街娼を見つけて車は止まり助手席のババは女と何か話します。日本人を餌に上客のふりをして冷やかして遊んでいるのだ。「七千円だ」と女が言えば「六千円だ」という。女が「OK、六千円だ」といえば「四千円だ」という。あつという間に娼婦数人に囲まれてしまった。隣の席のラデイも窓を開けてしまったので女は顔を車内に突っ込み東洋人を相手に交渉を初めてしまう。めんどろなので「日本に恋人が待っているんだ」と繰り返すが「アフリカのもっと良い恋人が彼女を忘れさせてあげるわぁん」などといって効果無し。そりやそうだ。旅行会社の名前を付けている車が日本人を乗せてガイドが娼婦に話し掛ければ、どう見たってお客サンだ。何を言ったって、別の女を選ぶための口実にしか聞こえないだろう。しまいには胸を触らせたり、股を触ってきたりする。それでも「日本に恋人が待っているんだ」と繰り返している。と女は。パチンと私の頬を軽く叩き、ガハハと笑いながら車から顔を出し離れていった。一夫多妻制の国だもんな。この後も「早く車を出せ」と促す私達を無視してババは何度も車を止めては女を冷やかした。その中で「フェラ・クティをこれから見に行くんだ、一緒に行こう」とババが誘い「家へ帰って着替えて来なきゃ」と女が言う。とババが「ノー」と言って走りだす場面があった。あれは素人娘だったのか、商売女がナンパを断る口実だったのか？。本当に来たいようにも見えたが車は五人乗って満員だし、わけ分からん。ラデイは隣でゲラゲラ笑っているだけだ。十二時過ぎに、ようやく、本当にようやく、シュラインへ到着。

八月二十六日（土曜）

夜明けのシュラインの帰り道でババは「明日は正午十二時にホテルへ迎えに行く」というので、「今日は遅かったから大変だろう。もっと遅い時間にしよう」と提案すると「だめだ。フェステイバルは一時からだ。忘れるな」と言っていた。私達はムリして十一時三十分に起きて待っていたが、彼は一時三十分にやって来た。

「今日はガソリン・スタンドが休みの日なので、燃料節約のためエアコンは消して走る」という。

この国はOPECで第六位に入る産油国なのに、自国の石油が足りなくて輸出した石油を輸入して使っているという。輸入が滞るとガソリン・スタンドは政府のお達しにより全店閉鎖するらしい。国家システムが壊れるとはこういうことか。

それでも私達の車のガソリンは底をついてしまい、特別営業しているスタンドへ向かう。当然、長蛇の列。そして人が集まる所、警察がいる。これ見よがしにデカイ銃をぶら下げているけど、このスタンドでそれを使ったら、どうなるんだ、こいつ。一時間無駄にする。ようやくドルフィンのおフィスへ。ここでバデボに立て替えてもらったお金を返すため、オフィス近くの闇両替屋へ。シェラトンの両替は一ドルが八〇ナイラだった。闇ならもっと高いだろうと思ったら大間違えで一ドル六五ナイラという。

政府がレートを一〇ナイラから実質レートの一〇〇ナイラに変更して以降、闇両替は文字通り、闇の怪しいお金を両替する役割を果たすようになったのでレートが悪いのだそうだ。あんな思いまでして、カバンの底に現金を隠して持ち込んだのに、正規に両替した方がレートが良いとは。

とにかく、六〇〇ドルを両替したがバデボに返すには充分じゃない。ここでババが、ガイド料を値引きするから契約を延長したらどうか、と提案をした。昨日の初日は初めてのナイジェリア、初めてのシユラインということもあって、一人一五〇ドル（二人で三〇〇ドル！という破格の額）でガイド契約をしていたのだ。当然、契約は今日で打ち切りと考えていたのだが、バデボは二人で一日五〇ドルという、私が咄嗟に提示した額をアッサリ飲んでくれた。これなら、しばらく雇えるので六〇〇ドルを今すぐ返す必要もない。どこかでT Cを正規のレートで両替してくれる場所もあるかもしれないし。

話がまとまると、バデボは良いカアちゃんとして「早く飯を食って来い」。隣のチャイニーズレストランへ案内されたが、メニューがちつとも面白くないし、くそ高い。それにフェスティバルの時間はどうなっちゃうんだ。ババに「このレストランで食いたくない」というと、彼はオフィスに戻り、私達がすぐにフェスティバルに行けることをバデボに告げた。

どうやらフェスティバルには社員総出で行くらしい。（そんなことやってるからGNPが伸びねえんだよ）家族旅行の準備のようなオフィスの慌ただしさの間、私達は隣のアート・ショップを冷やかしてみる。店長の彼は広大な土地にアート工場を持っていて「日本へも商売で行ったことがある」と何年か前の写真を見せてくれる。輸入業者を紹介して欲しいと迫られたので、「友達の心当たりを尋ねてみる」とか調子のいいことをいって色々話を聞いてみた。彼の英語はキレイで分かりやすかったのだ。「しかし、固定相場制でレートが突然四倍にも変動するような国とはリスクが多すぎて誰も商売したがらないだろう」と釘をさすと「七週間後に選挙がある。それで今の政府は負け、違う政府に代わるので心配ない」という。その楽天と軽薄が、状況を長引かせてるんだったりして。

九十三年ババンギダ政府は選挙に負けたので、独断で選挙結果を無効としてアバチャを新しい大統領として立てた。怒ったヨルバ人は暴動を起こしたが、政府はあの恐ろしいアーミーを使ってそれを鎮圧し、それ以来この国は緊迫し混乱した状態が



ずっと続いている。そして十月の選挙だ。レートが四倍というのは今年の二月、政府お達しにより一ドル二ニナイラだった。レートが八〇ナイラになった事をいつている。そのころ私はこの旅行のために一ドルが一円前後する度にハラハラしていたのだ。ばかばかしい。

フェスティバルに着いたのは三時三十分だった。十一時三十分から始まったというのに、あと三十分で終わってしまうらしい。バデボを先頭にステージに近づく。ステージ左に太鼓が並び、中央に数人が観客に向かって腰掛けている。その真ん中に座っているのが「オバ」でその隣がチーフ。このフェスティバルは新しいチーフの就任式なのだ。オバというのは王様のこと。新チーフの前に老人が順番に跪き、各十分ほど何か説教じみたことをいったり歌ったりする。オバは時に涙を浮かべたりしながら「エシエ（ありがとう）、エシエ」と返事をする。観客は老人の話に「ああ、もつともだ」とか「ううん、良いことをいう」とかいつて肯く。

用意された椅子は満員なので、ステージは見えないが袖の一番前に立っていると、お婆さんが椅子を詰めてくれて「座れ」と笑いかけてくれる。その席はステージをギリギリで見ることができるとも悪い席ではあるが、私の立っている場所よりはマシだ。お言葉に甘え座らせてもらう。「甘える」なんてヨルバに来て初めてじゃないかな。

間もなくバデボが私達についてくるようにいうので、お婆さんにお礼を言っつてその席を離れた。せつかく座らせてもらったのに悪いような気がする。なぜなら、その後私達を通されたのはオバとチーフが並ぶその列の次の列の椅子だったからだ。お婆さんを含む観客と対面する格好になってしまった。神聖な儀式に遅れてやってきて一番良い席に座る日本人に観客の視線は集まる。緊張する。目の前に座るオバに何か失礼でもしたら、イケニエにされちゃうんじゃないか。

説教が終わるたびに太鼓が三十秒ほど鳴って、私を喜ばせてはパツと終わってしまう。太鼓の音を録るためにウォークマンを回し続けている。ようやく説教がすべて終わりステージは太鼓とアゴゴ・ベルで大騒ぎになる。間もなく主役のチーフはパラスの中を沢山の人に囲まれながら立ち去ってしまい、ステージは子供達と数人の大人の大人が残り、鳴りやまぬリズムに乗ってダンスフロアと化した。ところが説教が終わる直前、ウォークマンの電池は切れてしまっていた。残念。

楽しく子供達と踊っていると、バデボがやって来て「オバの部屋へ行こう」という。一転して緊張してしまう。部屋の入口で、ババを真似て中に座っているオバに腕立て伏せのような挨拶をする。中には十人くらいの人が居て、客（部外者）は私達だけ。なるべくオバから離れて座る。こちらの英語力を察してくれてか、オバは一方的に話すだけでバデボが通訳をいれてくれる。それでも分からないとババが通訳してくれる。全部英語なのだけれど、ピジー・イングリッシュと呼ばれる日本語のカタカナ英語みたいなもので、全然、わからん。

三種類の木の実をプレゼントされる。ビタ・コラはアーモンドに似ていて薄皮を剥いてかじる。味は苦いが長寿の象徴。コラ・ノーツはクルミのような形で、味は渋いが調和の象徴。アリゲータ・ペツパはワニの頭のように割ると鼻くそのような実が一杯出てくる。見かけはエグイが良いもの（Wells）の象徴。

シンヤが「ノートを欲しい」と何度となくババに言っていたのだが、ようやくガソリン・スタンドで買い物をする事ができた。何となく彼（もしくはわオルバ人全般？）のイイカゲンな性格を意識し始める。彼はノートの事を聞かた「ああ、そういえば」と、毎回忘れてしまっている。スタンドで突っ立っていると、見るも哀れな老婆が赤ん坊を連れて「何かくれ」とやっ

て来る。五〇ナイラ札しか無いのでそれを一枚やると、ババが猛烈な勢いで走ってきて、怒り、「やる必要ないっ」と彼女から五〇ナイラを取り返そうとした。すると彼女は先程までのヨボヨボの老婆とは思えない俊敏さで、サツとそれを仕舞い、後ずさりする。ババは老婆に向かって憎々しく「オマエはラッキーだな」。

バデボがドライバーをこれまで一緒に行動してきたタジュとは違う、別の「より立派な人」を頼んだという。タジュは運転は荒いがシャイな笑い方をするいい奴だったので、彼を明後日のオシヨボまでのドライバーにするように頼んでみる。了解してはもらえたが「予約をしてしまったドライバーにキャンセルして謝らなければいけない」という。ドルフィンのおフィスの前の駐車場で彼を紹介された。「より立派な人」らしく、年配で風格もあり、チンピラじみたタジュとは大違い。「申し訳無い、タジュと私達は同じ年頃で、ヨルバに来て以来、ずっと一緒に行動していたので友達になってしまったのです」等もってもらしい弁解をすると「気にするな」と握手をしてくれた。同僚のドライバー仲間もニコニコとそれを見ている。車に戻るとシンヤが「いくらか渡した方がいいんじゃない？」と五〇ナイラを数枚くれたので車中からそれを渡そうとすると、彼はそれを受け取ることを頑なに拒む。さすが「より立派な人」だ。「これは謝罪の気持だ」と無理矢理押し付けて車を出させた。振り返って彼等を見続けていたシンヤが顔色を変えて「あいつら車が出たら本気で奪い合いしてたぜ。子供みたいに」。車が出るまで待つ所が「より立派な人」なのだろう。

今夜もシュラインだ。ホテルに戻り、ババが迎えに来るまで仮眠。「午後九時に来る」はずの彼は十一時にやって来た。しかも「ラデイが後から来るので待つ」という。間もなくラデイはやって来たが結局ホテルを出たのは十二時近かった。急いでシュラインへ直行だとばかり思っていると、結構な距離を高速道路に乗りコロラドという飯屋に着いた。私達は九時に来るといふババを飯も食わずに待っていた。イライラしすぎて空腹感も無い。

飯は下町のテーブルが六つしかない庶民的なレストランだ。ガリ、カサバ、フフはどれもパンのような役割で、それにエバというものが入ったスープに浸して食べる。このスープの中に浮かぶ球体は明らかに哺乳類の内蔵で、見かけがエグいだけでなく、ゴムのようで噛み砕くことができず、飲み込む時には死ぬんじゃないかと思った。

レストランを出て今度こそシュラインかと思えば、また娼婦を冷やかしている。何人か声をかけながら走った所でアーミーに停められてしまう。十ナaira払って逃がしてもらったが、その直後にまた娼婦に車を寄せさせるババに対して、ついにシンヤが切れてしまう。

シュラインへ着いたのは午前二時。この日は二曲で朝を迎える。ホテルの部屋に戻るとタジュ、ババ、ラデイの三人も付いて来た。一休みして帰るのかと思ったら眠ってしまう。特にババは「香取線香の煙で鼻が痛いから消してくれ」などといいながら、シンヤのベッドで寝てしまった。あまりの厚かましさにシンヤは怒りを通り越して笑いが止まらなくなってしまった。彼はこの日、男とベッドを共にしたわけだ。それも漫画みたいなデベソのクロンボと。

八月二十七日（日曜）

目覚めるとアフリカ人達はもう居なかった。シンヤは何時頃寝たのだろう。どちらにしる当分起きそうにないので、以前から目を付けていたホテル内のフラミンゴ・バーなるラウンジへ一人で行ってみる。どうしても何かフレッシュ・ジュースが飲みたかったので高級なボトルに入ったリングジュースとパイを二個注文する。七五〇ナイラもしたボトルなのでムリして全部飲んで下痢をする。

部屋に戻りシンヤが起きるとババもやって来た。が、契約上やむを得ず来たという感じでベッドで眠りこけている。放っておいてシンヤと買い物に出掛ける。ホテル近くのマーケットでミネラル・ウォーターを買い、そのお釣りでホテルからついてきて煩かった少年を追い払い、チャイニーズ・レストランでシンヤの朝食に付き合う。元イギリス植民地らしい重厚な銀の二つのポットには、お湯とインスタント・コーヒーの粉が入っている。アンバランスに私達は笑ったがナイジェリアでコーヒーを飲めたのは、これきりだった。それ以外にモルチというソフト・ドリンクを頼んだが、これは黒砂糖水。

何度か「ババが起きて私達が居なかったら、心配しないだろうか？」と考えたが、「そんなワケ、ぜーったい無いよ」とシンヤは言い切る。部屋に戻ってみるとババは居らず、今度は私達が彼を待つハメになる。「私達を捜し回っているんじゃないだろうか？」と思うのだが、シンヤは「そんなワケ、ぜーったい無いよ」と確信に満ちている。ババは恐ろしく職務怠慢である反面、金に関しては繊細でかつ、バデボの命令に対してはとても忠実だ。彼がガイドをしているはずの時間に私達が危ない目に会ったらバデボはババを責めるだろう。彼は私達が今散歩してきたホテルの近所の巨大な迷路のような市場を、冷や汗を流して走り回っているかもしれない、と思ったのだ。今日はシュラインでフェラの息子のフェミを見る予定だ。フェミの

シヨウはオヤジのフェラと違って午後七時にスタートする。どちらにしるババはそれまでには帰って来るだろう、とまたしても仮眠を取ることにする。

ババは六時過ぎにやってきた。私達の部屋で寝ていたらバデボから連絡があつてオフィスへ呼び出されたのだという。シンの勝ちだ。

下痢が治らないで体力が落ちてきたので、シンヤがシュラインのおみやげに買ってきたモノを試して眠ることにする。ムリしてドドを大量に食い、腹がはちきれそうだったのが楽になる。ドドはバナナと肉を焼いて独特のソースをかけた料理。これで明朝はひどい空腹で目覚めるだろう。そしてヤムイモとあのテニスボールのような内蔵をライオンのように、むさぼり食えば、身も心もアフリカ仕様になるはずだ。

八月二十八日（月曜）

午前九時三〇分

珍しくババが時間通りにやって来る。デポジットの現金（ナイラ）をバッグにドカッと詰め込んでホテルを出てオシヨボへ出立。穴だらけのエキスプレス・ハイウェイに乗って二時間ほどでイバダンへ。そこからさらに一般道を二時間ほどでオシヨ

ボへはいる。レゴスの緊張感とは対象的な田舎町で、何度も何度も通行人に道を聞きながら、やつとツインズ・セヴン・セヴンのオフィスへ到着。それくらい事前に調べておいたらいだろうに。地図ももってないんだから。

考えてみたら私はセヴン・セヴンの顔を知らない。絵も音楽も好きだから、彼の経営するというホテルに泊ることにしたのに。2階のオフィスへの表階段の回りに黒い顔がいくつもあるが誰がセヴン・セヴンなのか分からない。うーん困った、と思いつき階段を登っていくと、明らかに回りとは異質の存在感を持つデカイオヤジがいる。間違いない、こいつだ。確信して近づき握手を交わす。そのまま奥の彼の部屋へ行き、移動で疲れた身体をソファアに沈めるとホッとする間もなく、彼はホテル代の話の切り出した。「約束のホテル代二五〇ドルの他にバス代二五〇ドルを別途請求する」という。約束と違う。「考える時間をくれ」と言い残し車に戻る。

四日の予定なので二〇〇〇ドルはシヤレにならない。私達は事前に近所のプレジデンスヤル・ホテルが一泊八〇〇ナイラで風呂、エアコン付きであることを調査してある。50分の1の料金だ。セヴン・セヴン・ホテルの予約は一日分しか取っていない。残りの3日間について、「より安い部屋を（私達に代わって）交渉するように」とバデボはババに私の目の前で命令していた。ババにその役目を実行してもらおうと頼むが、彼の様子がおかしい。やたらと帰りがかるのだ。「今日までのドルフィンの清算を」というので現金（ナイラ）を大枚数え終わると「俺達の仕事は終わった。もう帰る」と言う。シンヤと私が今後のホテルを相談している間も「ほら、ほら何やってんだよ、さっさと降りろよ」と腕時計を指で叩いたり口角に泡を立てまくしたてる。あんまりヤカマシイので「ああ、分かったよ。ホテルの交渉は自分達でやる。さっさと帰れ」と言って車外へ出てバッグを引きずってオフィスへ向かうと、ババは慌てて車から出て来て私に詰め寄り「怒ったのか？なぜ怒るのか？」と問う。「帰りたいんだろ。さっさと帰れよ」というと、彼は私の鼻先に顔を近づけて「ドウ・ユー・ファイト・ウィズ・ミー？」（ケンカするか）と脅す。「オマエは自分がレゴスへ帰る事ばかりを考えて、ちつとも俺達の力になるうとしない

じゃないか」というと「早く帰らないとバデボに怒られるのだ」などと見え透いた事をいう。「オフィスから電話しろ。俺がバデボにオマエが遅れる理由を説明してやる」ということで何の結論も出ないまま、再び二階のオフィスへ。

バデボの電話に「ババとタジュはあと二〇分したら帰る。予定から遅れたら私の責任だ」と報告したが、ババが宿代の交渉に非協力的であったことまでは話せない。理由はバデボの英語は少々分かりにくい（向こうにとつても同じ）、電話回線が悪く聞こえにくい、そしてババが横で目と耳を大きく開けて私を見ている、ここでババを敵に回せばこの交渉を有利に運ぶのが難しくなる、といった考えが頭をめぐり説明するのが面倒になったからだ。しかし、私達がセヴン・セヴンと金額の交渉をしているうちにババは消えていた。

私達は五〇〇ドルを四日間払える金など持っていないこと、部屋は立派でなくても良いということ、足は勝手にタクシーでも使うからバスは必要無いこと等を精一杯説明してみる。「じゃあ、いくらなら良いんだ？」と聞かれ、咄嗟に「私達は一日二五〇ドルと聞いて来た」と答えると「OK、それを了承しよう」。あっさり半額になってしまった。好きなアーチストに会うことが出来たのに、最初の会話が値引きの交渉とは（楽しい）。その後で「先月、日本から商社の人達がパームワインを調査しにやって来て、その時はこの額を請求したんだよ」というので「だって、そいつらはビジネスでしょ？。俺達、貧乏旅行者だもの」というと「そーなんだよな」と納得している様子。

セヴン・セヴンはアメリカ行きを私達のためにキャンセルしたのだという。私達がこのホテルの存在を知ったのは板垣真理子という人の旅行記のだが、この本でもセヴン・セヴンは同じセリフで彼女を恐縮させたと書かれている。同じアメリカ行きというのが笑わせる。歓迎の言葉、みたいなものなんだろう。



バス（旧型のニッサン・キャラバン）にガイドとして乗り込んだミシェルはセヴン・セヴンのマネージャーに最近就任した男で、その事が載った新聞記事の切り抜きを大事に持ち歩いている。日本で受け取ったFAXによれば、彼は私達がホテルに泊ることをとても歓迎していて、ぜひ隣の都市イレ・イフェや周辺の観光スポットを無料で案内したいということだった。彼はまず自己紹介を終えると一日六〇ドルの支払いを要求した。六〇〇ナイラと聞き間違えて「まあ、いいか？」などと渋々、承諾しようとしたら「そんな金は道端の乞食にくれてやる額じゃないか」とハデなアクション付きでいわれる。やれやれ、また交渉か。

バスはオシユン・寺院へ。オシヨボはオシユン州に属していて、オシユンは子供、安産の神様でこの寺院の奥にある神秘的な川に住む人魚だ。ミシエルの説明に寄れば「五年前に白人がやって来て捕まえて連れ去ってしまったのだ」というが、別の人は「そりゃ、ウソだ。オシユンは白人に写真を撮られるのが嫌で出てこなくなってしまったのだ」ともいう。どちらも「オシヨボに住むたくさんの人がオシユンを見ている」と言っていた。エイモス・チュツオーラのブッシュ・オブ・ゴーストに登場する、無数の子供の顔を身体に張り付けた「偉大なる母」の像を発見。他にも妙な形の石造や建物を通り過ぎてオシユンの住む怪しい川にでる。

二〇メートル程の口の字型の建物の中央に座っているシャーマンのお婆さんが、私達の旅程をオシユンが守ってくれるよう祈ってくれる。四国のお遍路さんは弘法大師と二人連れだが、私の場合は爺さんの棺桶と一緒にに入れて焼いた十円玉のお守りと、私の無事を祈ってくれている菩薩のような静子おばちゃんと、5年前に死んだジャガタラの江戸アケミのバッジと、尊敬

する吉波大人に頂いたジッポのライターと、ゆかのお守りのひょうたんと、そのうえオシユンが守ってくれているのか。故人と今人、神さまと人間さまが入り乱れて背中 of 辺りが賑やかな気がする。

川を少し下ると長さ二〇メートルくらいで幅が一メートルくらいの橋がある。昔の人はこの道を通り何日もかけてレゴスマで旅したという。ある日、この橋を渡って隣の部族が戦争にやって来た時、オシユンは飯を作って兵士に食べさせることで、彼等の戦争を思いとどまらせたという。何だかよく分からん話だが、確かに感じる不思議な空気を味わうため十五分休憩。寺院の出口で妙な形の小屋があり、入り口が女性器になっていることをシンヤが発見。巻き貝のような内部から外に飛び出して「ボーン・アゲイン」、簡単新生。

バスへ帰る道でミシエルが「何を考えている？」と聞くので「金が無い」と答えると「金の事は気にするな」といった。

オシユンへの挨拶を終えてホテルへ行く途中、オフィスでセヴン・セヴンを乗せる。オフィスから町外れのホテルまではバス（ハイエース）で二〇分くらい。途中に広がる椰子の木の生えている土地は全て彼のものだという。本で読んで彼が農業をやっていることは知っていたが、もつと小規模な自給自足のようなのを想像していた。

太陽は傾いているがまだ元気だ。バスに揺られながら、遠くの空と椰子の木を見ていたら不思議な気分を味わった。私は旅行中に日常の嫌な事は思い出さないように、思い出してもすぐフタをするようにしている。なのに今、ふと思いついた遠い国での嫌な出来事が、思い出す先から蒸発してしまうのだ。面白いので日本に残してきた嫌な事を次々に思い出して蒸発させて

みた。天気の良い朝に干した布団をバンバン叩いて、昨夜の悪夢を追い出してみたいだ。これがアフリカの太陽の偉大さか。それとも、さつきからずうつと道の両脇に続いている麻のグリーンベルトのせいか？

検問の威圧的なアーミーが「あ、セヴン・セヴンさんだ」と道を通してくれる。ミシエルが得意気に「聞いたか？、ボス（セヴン・セヴン）は有名人なんだ」。

バスは国道を町外れまで来て、右折してから森の中を五分程走って停車。ホテルはバンガロー形式になっていて、どの部屋もユニークな造りで楽しくなる。裏口から階段を登ると小さな橋を渡って隣の建物へ、或は建設中の音楽を演奏するための建物へ行くことができる。案内してくれた隣の建物も面白い部屋で「ここに泊るか？」と聞かれたが、部屋が暗いうえに雨漏りがしているらしく、足を踏みいれると絨毯から水がしみだしてきて、蛭でもいそうだ。最初に通された建物に宿泊することに。この部屋には円形のリビングを中心とした放射状に三個のベッドルームがある。私達が各々のベッドルームを決めると、持ってきていたシーツをセヴン・セヴン（面倒なので以下オヤジ）自ら敷き始めた。世界的なアーチスト、ツイーンズ・セヴン・セヴンにベッドメイキングをやらせてしまう。少しの感動も束の間、掛けるものが無いことに気付き、聞いてみると「ベッドカバーを掛ければいい」という。蚤、ダニ何でも居そうなベッドカバーを掛けて寝るのか？。恐縮しながらも「朝方、寒いんじゃないか」と聞くと、空いているベッドルームから別のベッドカバーを外して持ってきた。便所の電灯が無いことや水が流れないことを指摘すると「全て明日までになおす」と答えた。

その後、ホテルの敷地内を皆（従業員等）で夕方の散歩をする。中央の大きな池（というか沼）を一回りする間にオヤジは建設中の建物（レストランや音楽スペース、アトリエ等）の事や、このホテルを海外のアートを志す人達に利用してもらいたい事などを熱っぽく語り「ホテル代が高かったらう、この夢のために協力して欲しい」という。このホテル「トロピカル・リゾート」は板垣真理子さんの本によれば八十九年に建設中だったが九十五年現在、やはり建設中だ。彼等は「今年の十二月には完成する」といつているが滞在中に工事をしている様子は無かった。私達の部屋と隣の屋根をつなぐ橋の下にシャンゴ（雷の神様）の像をアデバヨが一人でせっせと作っていただけだ。背が低く、丸顔に人なつこい笑顔のアデバヨはホテルのチーフデザイナーだというのが、最後まで部下らしき人は見ることは無かった。

オヤジの五人いる奥さんの内の二人の奥さんの手料理による夕食を待つ間、彼は様々な話をした。誇らしげに飾られたババンギダと握手する写真を指差して自分の偉大さを説明する。前にも書いたようにババンギダは勝手に大統領の選挙を無効したり、首都をヨルバ人の町レゴスからハウサ人の町アブジャへ移そうとして暴動の原因を作り出した、フェラの宿敵ともいえる前大統領だ。オヤジはビジネスの拠点をアブジャにも展開しているという。描く絵に子供のような奔放さを感じたため、谷中安規（版画家）のような人物像を勝手にイメージしていたのだけれど。彼が写真を自慢気に話す姿に少々幻滅する。フェラ・クテイに関してどう思うかを聞くと「彼と私は別の道を歩んでいる」と答えた。

運転手が奥さんの手料理を運んできたが、もう一人の奥さんの分を忘れてしまった。これを聞いてオヤジが烈火の如く怒った時はまさにシャンゴ（雷の神様）を感じた。ヨルバ語で運転手をボロクソに叱った後、私達に「あいつ（運転手のこと）は頭が狂っているから、どうしようもないんだ。残りの夕飯を取ってくる」といつて部屋を出ると一人で自動車に乗り込み、轟

音と同時に走り去る。気まずい沈黙に耐えかねて「ビッコだけど運転できるんだね」とミシェルにいうと「一度彼の運転する車に乗ったけれど物凄かった。二度と乗りたくない。あの足も彼の運転による交通事故のせいなんだよ」と教えてくれた。その後、いくら待ってもオヤジは帰って来ない。忘れた頃別の使用人が飯を運んできた。

オヤジが出ていって間もなく発電機が故障して電気が消えてしまい、復旧の努力は為されたが、数分おきに停電を繰り返した後、結局ガソリンが無くなったということで私達はロウソクの生活になった。ロウソクの燈で冷たいシャワーを浴びる。やがて蛾や虫がロウソクにたかり、A型の血液を持つシンヤはこれまでの疲労と、これからの（予想される）疲労のため、頭痛と下痢になってしまった。気持ちは分かるが、ここで暗くなったらオシマイだ。ムリにでも笑うしかない。一度笑ってしまえば、一泊二五〇ドルでこの境遇は確かに笑える。

夜中に腹痛で目覚めた。ロウソクを灯して屋外にある便所へ行く。気がつくとも目の前にエイリアンを小さくしたような影がある。ロウソクの燈が揺れると今にも襲いかかって来そうで怖い。「何でもいから動かないでくれ」と念じていると、壊れていなければ水が溜まっているはずの頭上のタンクで何か音がたてた。ズボンを下げてしゃがんだ状態というのは、ひどく無防備なもので心細い。ダダダという音と同時に黒い塊が目の前にドテツと落ちてきて、開けておいたドアから走り去る。月明かりでそれが巨大なネズミだと知る。

八月二十九日（火曜）

朝目覚めるとシンヤが横に寝ていた。巨大なベッドなので気が付かなかった。寒かったのだという。昨晚、私達は毛布が無いので、ベッドカバーをかけて寝た。その時、私は周到にも利用されていない寝室からベッドカバーをはがし、自室のと合わせて二枚重ねにして寝ていたのだ。

オヤジの五番目の奥さんソラが朝食を届けてくれる。彼女は二十八歳で三人の子持ち。オヤジが大成してからの奥さんらしく、とても美しい。「味覚は全然違うけど、女性の美しさは万国共通だな」とシンヤ。

とうもろこし粉をドロドロに溶かした酸っぱい汁をボールに一杯（お腹には良さそう）とスクランブル・エッグ（これは普通の一流ホテルのレストランの味以上）と豆の唐揚げ（これも鳥の唐揚げより旨い。ビールに合いそう）。昨日オヤジが大量に置いていったパンと一緒に食べる。缶詰のバターを開けたが工業用油の臭いがする。パンは何処で食べても、とても旨い。なのにバターがこんなに不味いのは不思議だ。開けてしまったバターの缶は水を満たしておく。冷蔵庫が無い時の保存法だ。うだ。

ミシエルが来てイレ・イフェへ観光。オショボはオシュンを守り神とする町なのに対して、イフェは鉄の神、オグンの町だ。美術大学を見学した後、オバ・パレスへ。オグンが眠る砂場のような場所に弾跡があり、その歴史を聞く。白人に連れ去られたオシュンといい、銃弾を浴びせられたオグンといい、この国の神話は妙に近代的だ。そのせいか、これらの神話を創り話と考えている人には一度も出会わなかった。「事実」なのだ。

裏手の小さな公園のような場所に深い井戸があり、そこから五メートルくらい離れた所に一メートル程の高さの筒がある。井戸のように見えるが、ただの筒でやはり、これにも言い伝えがある。「昔、オバ（王様）の何人かの奥さんのうちの一人が、どうしても子供ができず、周囲に辛くされていた。ある年、日照りで井戸が枯れて皆が困っていたとき、その奥さんがこの筒に入ると、少し離れた井戸から水が吹き出して、それは今に至るまで決して枯れたことがない」そうだ。「筒に入ると」って、それ身投げなんじゃないの。「水子」という言葉を思い出す。

博物館へ。休館日の所を無理に開けてもらったのだが、ちっとも楽しくない。だが御当地の文化に敬意を示す意味でも、この種のものに付き合うのは観光ビザの義務または宿命だろう。博物館員のヨルバ語の説明を英語に訳すミシエルの説明をテキトウに聞いている。時々「シンヤにも説明してやれ」と促されるが、私はろくに聞いてないし、シンヤは聞きたくも無いという顔をしている。ミシエルの博物館員に対する面目もあるので「へー」とか「ほー」とかいつてみる。

車に戻りミシエルは次の場所、昔のオバの住居である「オドウドウン」を案内しようとしたが、シンヤは「疲れた」といいキャンセルする。「ばかやろー下痢して疲れてるのは俺だっ一緒だ。好意に応えるためにも気張らんかいっ」と腹を立てつつ、シンヤを残してバスを下り、ミシエルと二人、オドウドウンへ歩きだす。二十分ほど歩き回ったが、周囲の壁をぐるり回っても入り口さえ見つからず、結局、バスに戻ってきた。気張って損した。

イフエからオシヨボに戻り、またしてもオヤジのオフィスへ。昨夜、ミシエルに「米ドルをナイラに両替したい」と頼んであり「ここでオヤジに替えてもらえ」ということらしい。銀行や町の闇両替のレートを調べる間を与えない、見事な段取りだ。「レートはいくらだ？」と聞くオヤジ（聞くなよ）に「八〇ナイラと決まってるんだろ？」とトボケると、あっさり通った。

やはりTCより現ナマだ。初めて政府規定のレートで両替出来た。ところがレシートは出ないという。半ば予想はしていたが、

やはりこのオヤジ、両替商の免許など無いのだ。隠して入国した金だからいいようなもの、入国審査で持ち金を正直に申請していたら、レシート不足で出国できないじゃないか。

「太鼓を買いに行きたい」と頼むと「店の女に太鼓を持ってホテルへ行かせる」としつこくいうが「楽器だけでなく楽器屋さんが見たいのだ」とワガママを聞いてもらう。決してウソではないが、彼のたかり体質への警戒感からでも、もちろんある。オモチャのようなオシヨボの町をゴチャゴチャ十五分ほど走り、小さな楽器屋（というか太鼓屋）へ着くと、確かに一人の少女が店番をしている。私達が楽器屋に入ると隣の店などから人が集まってくる。品数は多くないので、ひとしきり値段を聞いて「今晚ゆっくり考えて、明日また買いに来る」ことにする。

スーパーマーケットに寄ってミネラル・ウォーターやクッキー等を仕入れる。普段は買ってまで食べたりしないような物も、とにかく食べ慣れた物ならば栄養の有無に関らず、元気が出るもんだ。かなり、衰弱したシンヤはここで「アフター5系の薬」と説明された「パラドール・エクストラ」を買い服用する。シンヤと店員が何個買うかを話している時、私が唐突にカプセルの中身を取り出してしまったので、周囲は絶句し店員は薬を急いで仕舞い込んだ、と店を出てからシンヤに聞かされたのだが、まるで記憶に無い。私も疲れているのか、少し熱っぽい。

かなり遅めの昼食。食事はガイド代に含まれているせいか、レゴスでもここでも実に庶民的な食堂へ連れていかれる。メニューなど見ても分からないし、また内蔵丸ごとスープが出てきたらゲツソリする。奥のテーブルで女性が二人、カレーライスのようなものを食べている。「あれだ!」。ミシエルにそれを告げると、彼はその女性のテーブルへ行き皿を覗いている。店員が料理を私達のテーブルに運んでくると、ミシエルは彼女達を私達のテーブルに運んできた。調子が良くて女好きはガイドの特徴か、ヨルバ人の特徴か。ババやミシエルが私達を楽しませようとしてナンパしているのか、ナンパのダシに私達を



使っているのは分からないが、体力が落ちている私達には煩わしいだけだ。店を出てから「料理を持って来いと言ったんだ、女を連れてこいと言ったんじゃない」と文句をいったら、ミシェルは腹を抱えて笑っていたが、冗談を言ったつもりは無い。「そうカリカリすんなよ」とミシェルに肩をたたかれて車に乗り込むと、私達のシートに彼女達が座って笑っている。その前に補助席（小さなシート）を出してシンヤが「こーなっちゃてんのよ」と疲れて呆れて困って笑っている。私も腹の底から込み上げる、力の抜けた笑いが止まらなくなった。

ミシェルは「日本に行きたい。日本に行って女子大生が食べたい」などと真面目にいう、立派なスケベ男のだが、敬虔なクリスチャンでもある。ホテルでトウインと話をしていたら突然、ムキになって話に割り込み「それじゃ、オマエは神様を信じてないのか」などと食ってかかられた。回りの連中が目を丸くしているなか、「それは答え方が難しい質問だ」などとテキトウにイナしていると「まあまあ」と、とりなしに入ったトウインは、さすがセヴン・セヴンの息子。土着の神様を信じているという。アニミズムという言葉を使っていた。おおらかなんだな。彼は銀行勤めを辞めてオヤジのホテルの仕事を手伝っている。親分肌で回りの信頼が厚いのが見ていて分かる。頭も体格も良い二十六歳。

夕方にホテル着。夕食まで時間があるのでコテージの前で池を見ながら夕涼みをしているとホテルの従業員がボチボチと集まってくる。

コラが「泳ぎに行こう」というので「水着が無いからだめだよ」と一度は断ったが、散歩がてら「水泳」を見に行くことにする。

コラは私達の身の回りの世話を一番してくれる、繊細な気配りができる優しい男だ。繊細で優しい性格と低い声があいまって、ホモっぽく見えるが、悪い気はしない。自分が英吉利人になったような気がする。まわりの皆から、イジめられつつ愛され、自分もまたその位置を愛し、受け入れているように見える。推定二十三歳。

行ってみると、なんの事はない、目の前の池の対岸で、アデバヨ達が作業で汚れた服と身体を洗うのが目的の水遊びだ。私達が作りかけのレストランの二階から眺めているのに気がつくと、「ヘイツ」と叫んでこちらの注目を引いてから、緑色の池に飛び込んで見せる。

どこにあったのか「ガンガン」と呼ばれる太鼓を叩いて遊んでいると、コラが空瓶を見つけて、ポケットから取り出した栓抜きをセットにして持ってきた。チンチンドンドンと楽しい演奏会となる。オヤジの曲「シヤンゴ」や、バリスターの曲「ニュー・フジ・ガベージ」を歌ってウける。

バリスターはフジ・ミュージックのスターで、フジ・ミュージックはキリスト教とイスラム教の混じり合ったナイジェリアの大衆音楽だ。大衆音楽だが、その用法と効能は若者が熱狂するクラブ・ミュージックに近い。

ネタが切れても、「もっと知ってる歌は無いのか」と際限がない。フェラの曲なら、たくさん知っているけれど田舎の夕暮れには相応しくない。

夕食は部屋でオヤジと一緒に食う。キャツサバと野菜とスモークした魚。オヤジは私達が蚊取線香を使用しているのを気にして「蚊がでたか？」と聞く。「蚊はいないが、マラリアが恐いので、念のためだ」と答えると「そうだろう」とひどく得意

気。ここはニューズ・ウィーク誌に「アフリカに蚊が居ない？」という見出しで紹介されたらしい。「なぜですか？」と質問すると「魚が食べちゃうんだよ」というアツサリした答。食事を残して下げさせると、それを部屋の外にたむろする子供達（従業員のこと）が食べている様子で恐縮したが、以降「心置きなく残せるな」と思い、安心する。庭の池の魚を養殖して商売にしたいらしいが、食べたもんじやない。

食事が済んでオヤジが帰ると、またしても電気が止まってしまった。今日は昨日に比べて施設が治るところか水まで出なくなってしまう。コラがバケツに池から水を汲んできてくれてシャワールームに置いてくれたが、二人がこのバケツで水浴びをした後、トイレ用の水は残らないだろう。「もう一個バケツに汲んできておいてくれ」と頼むと、しばらく辺りを探し回って「バケツはもう無い。明日、バケツを買ってくる」というので「明日は水道をなおせ」と、お願いする。

トウインは私達の部屋でずっと話をしていたが、電気が消えると部屋から出て行って電気技師と呼ばれるアリヨの子分が発電機と格闘しているのを手伝い電気を復旧させた。

アリヨはトウインと腹違いのオヤジの息子。折れそうな細い身体に、チンピラっぽいファッションと眼を持ち、煙草をちやんと吸う、推定二十二歳。ここでは大抵の人は喫煙の習慣が無く、くれれば貰うが、ファッションとして吹かす程度だったのだ、これは珍しい。面白いことにアリヨはチンピラらしく、常に子分を一人連れているのだが、そいつがその「電気技師」だ。

何度か繰り返すうちにアリオの身分は「オイルが無くなった。明日、買いに行く。今日はもう電気はダメだ」と私達に宣告しに来た。昨日はガソリンで今日はオイルか。私達は話に飽き、ロウソクの燈でキャセイ航空でもらったトランプで遊ぶ。トウインは神経衰弱でトップをとり、ババ抜きでビリになったので、記憶力は良いが靈感は無いことが判明した。

この後、ダラダラと夜中まで宗教、政治、音楽、女性等の話をする。夜が深まれば、話題も深まる。トウインは神道も仏教もよく知っていて、「日本もちゃんと古来の宗教に戻ればパワフルになれるのに」といい、「原爆がドイツでなく日本に落ちたのは肌の色のせいだ」といい、「ババングダ政権は理想が高すぎて政策実施に失敗したんだ」といい、「首都をアブジャへ移すのは不可能だ。何故ならアブジャには港が無いからだ」といい、「自分には音楽の才能は無いけれど時々、自分のために詩を書いている」といい、「現在、自分以外の人と結婚する予定の女性に恋しているが、とても彼女を尊敬しているので、その結婚を祝福している」といった。

トウインが出ていった後、シンヤは自分が異常に元気であることに気付き、昼に飲んだバラドール・エクストラの効果を感じ悪がりながらも歓迎し、私は泥のような身体をソファから引き剥がしてベッドに倒れ込んだ。

八月三十日（水曜）

今日はミシェルでは無く、ガニがドライバー兼ガイドで、車も赤い日本の乗用車だ。（この国には日本の中古車がたくさん輸入されている。）さすがにガイド料を一銭も出さない客に、オヤジのマネージャをつとめる男は愛想をつかしたか。ガニの

英語はかなり分かり難い。が、それでも愛想はやたらと良い。何かにつけ大笑いをする。会話がうまく通じない時でも、その通じないという現象を大きな口を開けて笑う。運転手付きバスでないこと、ミシェルでないこと、英語が通じないこと等に引け目を感じているのか、それとも彼の性分なのか、盛り上げようという気持ちが良い分かる。フランス語もできるプライドの高いミシェルより、かえって私達にとっては気が楽だ。

近くの朝市へ。日曜雑貨が右側に、食品が左側に並ぶ。ホテルの連中にバナナを買って行ってやろうと思うが、一房のあまりの巨大さに諦める。バナナの房が三百六十度、何段にも重なった太い幹を、江戸の火消しのように差し出されたのだ。美術館なんかより歩いて楽しいヨルバの日常の風景だが、どれも面白い食いたくはならない。布の店で立ち止まっていたら、ガニが私の手を引き、店の奥へと連れ込まれる。妹の店なのだという。一人の男に複数の奥さんがいて、それがまた、たくさんの子供を生むのだから、親戚まで合わせれば、この小さな町じゅう、身内がいるだろう。目的のバティック（ろうけつ染め）ではないし、シンヤが値段に不満をいうが、お義理で一枚買っておく。

オヤジの家へ行く。彼の一番若い奥さん、ソラのデザインによるバティックを見せてもらうためだ。昨日、食事の時に彼女は自分をシェラと名乗っていた。西洋人向けがシェラ (Shella) で本当はソラ (Sola) なのだそう。作品のサインは全てソラとなっていた。

三階に通されると、小さなフロア一杯に布だの服だのを広げられる。値段を聞いて「高いな」とは思いながらも、あまりに楽しいデザインなので五枚の布と一枚の服を選んでみた。「主人から、彼等は若いから値引きをしてやるように、といわれている」そうなので、まとめて値引きの交渉をしようとしたのだ。お金の相談をするためシンヤとバルコニーへ出る。お金の管理は全面的にA型の彼に任せてある。「いくら位なら、買ってでもいいだろうか」と切り出すと、「高い！西部デパートで十万

円以上した太鼓が五千円程度で買えることを考えてみる」と取りつく島がない。値引き交渉をするまでもなく「ごめんなさい。私はこれ一枚しか買えない」と美しいソラに謝ると、横でババアが「チェツ」と憎々しい舌打ち（というには余りにデカイ音）をする。ソラはこの姑のようなオヤジの一番目の奥さんの顔色を見て「アナタがこんなに選んだんじゃない」というが、このババアの舌打ちで、数を減らして値引きの交渉をする労力も惜しくなった。ふてくされて、居心地の良いバルコニーで何本も煙草を吸い、コーラを飲み、飯を食い、楽器屋へ行くことにする。飲み残したコーラにソラの幼い子供が飛びついた。

シケレや太鼓を大量に買込み、おみやげ用にミニ・シケレも大量に注文したのに、シンヤの初恋の君、田中真理子さんに似た楽器屋の彼女は決して値引きはしてくれない。ガニが少女と私の間に入り「ここはレゴスじゃないんだ」というようなことをいうので、恥ずかしいような気がして引き下がる。それでも私の蛍光ボールペンをあげると少女のように（少女なのだが）喜んで、太鼓用のスティックを一本くれた。ピンクのボールペンで書かれたレシートを持って楽器屋を後にする。

下痢が治らず、体力が限界に来ていたので、パレードル・エクストラを買うため、「昨日のスーパーへ行ってくれ」とガニに頼む。狭い町らしく、「昨日、薬を買ったスーパー」というだけで彼は理解した。コンビニ程度の小さな店なのに、ガードマンの男が入口に立つ。彼はシンヤを気に入っているらしい。握手や挨拶で手間取るシンヤを見捨てて薬屋へ。「ばらどーる・えくすとら」、十年分でも買いたい気分だ。狭い店に昨日ミシェルが食堂で捕獲した彼女達が来ている。まったく、せまい町だ。幸いガニは奇跡的にも、女に対して真面目な男だ。話が長くないうちに「バイバイ」と車に乗り込む。私達はホテルに帰って大量に仕入れた太鼓を叩きたいのだ。

まだ昼間の陽射しの夕方、ホテルに着き太鼓を叩き始めると、すぐに仕事を放り出したホテルの連中が集まり大騒ぎになる。驚いたことにガニはオヤジのバンドのベーシストだという。フジ・ミュージックよりはアフロ・ビートの方がお好みらしい。私はアフロ・ビートの創始者フェラ・クティが好きでナイジェリアに興味を持ち、その後太鼓と肉声だけのフジ・ミュージックに興味を持った。彼に「フジ・ミュージックにはベースが無いからつまらないだろう」というと、一層大きな声で「そーなんだよ、そーなんだよー」と笑う。コテージの前の階段で、ホテルの連中と延々とリズムを刻み、踊りを踊る。トウインは「俺はエンジニアだ」といって私のウォークマンでマイクをモニタリングしながら録音をしてくれている。不良のアリヨはサジェ・ミュージックが好きだけあって、とてもダウンロードンが巧い。

サジェは若者達が作り出した、路地で生まれた音楽。フジの伝統的な部分を排除して、西洋音楽との差異を強調したようなサウンド。出生もスタンスもラップミュージックに似ている。

コラは太鼓やシケレを演奏する人達の足にたかる蚊を退治してくれて、小学生のブソイは空いている楽器を見つけては控え目な音を出し、手持ち無沙汰な人を見つけるとそれを渡す。何時間もリズムを刻んで、辺りは暗くなり、皆は疲れ果て座り込み、トウインは私達に昔話を聞かせてくれた。

## 昔話 1

農夫が歩いていると、ハゲタカが蛇を狙っている。農夫は「私の中に逃げなさい」といい、蛇は農夫の腹の中で難を逃れた。農夫は蛇に「危機は去った。さあ、出ておいで」というが、蛇は「嫌だ。ここは暖かくて気持ちいい」と出てこない。困った

農夫はハゲタカの知恵を借りる。「そこに誰か居ますか」と農夫の腹に呼びかけるハゲタカ。「入ってます。私、蛇が入っています」「え？、聞こえませんか。誰か居るんですか？」とハゲタカ。「居ますってば」と蛇。繰り返すうちに蛇はイライラして、農夫の喉元まで出てくる。蛇が顔を出したら叩いてやろうと棒を振り上げる農夫。蛇が顔を出したその瞬間、棒を力一杯振り下ろす。が、蛇は間一髪で頭を引込め、空振りした棒は蛇の名を呼んでいたハゲタカの頭を叩く。以来、ハゲタカの頭はハゲました。

## 昔話 2

昔、雨の降らない日が長く続いた時、ハゲタカは地上の生物を代表して天上の神様に「雨を降らせてください」と、お願いに行きました。神様は「はい、OK」といって間もなく雨を降らせ、ハゲタカはそれを巨大な瓶に入れ、地上に戻って行きました。ところがハゲタカは地上直前で誤って瓶を壊してしまい、せっかく降った雨は地面に染み込んでしまいました。皆は怒ってハゲタカをボカボカ叩いたので、ハゲタカの頭はハゲました。

七時頃になってオヤジとミシェルがやって来た。彼等は今日、飛行機でアブチャへ行ってきたという。「さぞ、お疲れでしょう」という間もなく、私達は部屋の外へ追い出された。私達の香取線香が気になったのか、締め切った部屋に殺虫剤を吹きまくっている。窓から覗きこむと部屋の中が霞んで見える。ホテルの連中は相変わらず、オヤジを手伝うこともなく、私達と部屋の外で夕涼み。真っ暗な中で部屋の明かりを頼りに、煙草を吸ったり、話をしたり。楽しい時間ではあるけれど、蚊に刺されてしまうじゃないか。



中に入るとオヤジが金の話を切り出した。二五〇ドルを四日分で一〇〇〇ドル、バッグの底板を剥がして隠し金を取り出して払う。あまりに馬鹿げた買い物に対して、損だの得だのの実感がない。実感がわいた時の後悔を和らげるために、または自分言い聞かせるようにこんな話をした。「私達は近所にエアコンもシャワーもあるプレジデンシャル・ホテルのツインが一〇ドル以下で泊れることを知っていました。それに比べて、ここは電気は無いし、シャワーは出ないし、トイレは流れないし、電話もありません」。ミシエルの顔が凍りついた。「けれども私達は貴方のこのホテルに対する計画に共感したからこそ、この大金を払うことに決めたのです」。「おお、なんて良い若者なんだ君達は」という反応を期待したのが愚かだった。オヤジは早口で「あそこのエアコンは壊れていて、うるさくて眠れたもんじゃないぞ」と口汚くプレジデンシャル・ホテルを罵りだし、止まらなくなったのだ。

最後に「大金を持って夜道を帰るのは危険じゃないですか」と聞くとオヤジはアタッシュケースを開け「フッフッフ、これは何だね?」。見ると現金がギッシリ詰まっている。城南電気か、こいつは。この俗物が自分の演奏前に雨天に向かい「ちよつと止んでろ」と言うと、本当に雨が止むってんだから、おもしろい。

不思議なことに、オヤジが帰るとまたしても電気が消えてしまう。ちつとも、おもしろくない。でも今日は有り難いことに便所の水が流れる。十一時までトウインとダラダラ話をする。固めの話題が続いたので、シンヤに「つまらないだろ。シャワー浴びちゃえば」と促すが「いや。面白い」という。偉大なり、パラドール・エクストラ。シンヤと同じく、ブソイが存在感を消すようにして私達の話を聞いていたが、彼には黄色人が珍しいのだろう。それでも、アメリカの音楽の話題になると「パブリック・エナミー」や「ゲットー・ボーイズ」を知っている、といって得意になっていた。

寝際にシンヤが「もう、明日は一泊八〇〇円でエアコン・シャワー付きのプレジデンシャル・ホテルに移ろうよ」と提案する。太鼓を買った今、オショボボでの目的は達成されているし、彼のベッドはダニと湿気がすごいらしい。私の方はその旨オヤジにどう説明するのか考えるのが面倒だし、大荷物を持って歩き回るよりは順応する方が楽だ、と考えている。払うものを払ってしまった今、オヤジやミシェルは黄色いカモを自由にしてくれるかもしれないが、楽器屋に注文したミニ・シケレの回収、太鼓を送るDHLの手続き、レゴスへの車のアレンジ、どれも自分ではウンザリする作業だな。

八月三十一日（木曜）

明日は早いうちにレゴスへ発たなければならない。朝食前にコテージやミュージック・スペースの写真を撮って歩く。アデバヨはもうシャンゴを造る作業を始めていた。私を見つけると「明日、帰ってしまうのか？」「そうだよ。レゴスへね。でも、日本へは火曜日に帰るんだ」「ボクは何をあげられるだろう？」私は勘違いした。ナイジェリアで「何かくれ」は乞食からガイドまで挨拶代りみたく言われ続てきた。「ごめんね。今、散歩の途中で何も持ってないんだよ」「そうじゃない。何かを記念にあげたいんだ」感動する前にポケットとしてしまい、咄嗟に「じゃ、昨日見せてくれた君のスケッチブックに描いてあつた君の夢ってやつ、撮らせてよ」「OK」といって走って行ってしまったので散歩を続け、建設中の建物の屋根に登って写真を撮ったりする。シャンゴ像へ戻るとアデバヨが戻っていたので写真を撮らせてもらう。シンヤが起きてきてブソイとコラも集まってきたので、もう一度、皆で池やアデバヨの他の作品をバックに記念写真を何枚か撮る。

今日はガニとミシェルが昨日の赤い国産車で買い物付き合ってくれる。今日はカセットテープ（この国のレコード屋はCDもレコードも置いていない）とソラのデザインより安いバッテリーを買ひ、昨日おみやげ用に十個頼んでおいたミニ・シエケレを少女の楽器屋へ取りに行く予定だ。

オショボの町へ入るとまたしてもオヤジのオフィスへよる。シンヤが「何の用だよ。いちいち寄んなくてイイよおー」と不満を垂れる。オヤジは「今日の夕方、私のバンドのドラマーがお前達のコテージへ行く。ワークショップを開いてくれるから太鼓の叩き方を学びたまえ」といって、そのドラマーを私達に紹介した後、私達の目前で「二時間分だ」といって彼に現金を渡す。シンヤは入る時とは大違ひのウキウキ顔でオフィスを後にする。

最初に少女の楽器屋に寄ると、まだ五個しかミニ・シエケレを編み終わっていないかった。先に他の買い物物を済ますことにする。が、少女は私達の車に乗り込んでしまう。あらら・・・。少し離れた家に彼女を送ってやるのだった。残りの五個は出来るのだろうか。また、スケベ心を出しているのかミシェルが少女を家の中まで送って出して出た。何やっつんだ、俺は」と見渡した風景がアフリカだった。今まで当たり前に見ていた景色と何も変わらないのだけれど、まっすぐ伸びる道にシャッターを切るとガニが「何を撮ったんだ」と聞く。うまく答えられそうにないので「ナイジェリアの空だよ」。

レコードの無いレコード屋を二軒はしご。テープは試聴して買う。試聴はテープが伸びていない物を選ぶためだ。ミシェルとガニが私達の趣味に合わせて買い揃えてくれる。二軒目の主人の老人は私が店を外から撮ると金を請求したが「たくさん、テープ買ってやるから安心しろ」といなす。

楽器屋に戻るとシエケレは十個完成していた。少女は私達のアイドルのようになっていたので、別れを惜しみながらも忙しく写真を撮って「さいなら」

安いバティックは忘れられたまま、ミシエルの奥さんの家へ。他の町で学生をやっているという奥さんと意味の無い会話を  
して意味の無い写真を撮って帰る。

少し町から離れたテーブル六個の食堂で飯。ミシエルの妹の店だという。そんなことだろうと思った。驚いたことにガニは  
私達と離れたテーブルを取ろうとする。レゴスでガイドと運転手の身分の違いは薄々感じてはいたが、彼はオヤジのコミュニ  
ンの一員だろうしバンドのベースリストだ。「一緒のテーブルで食べよう」と誘うと「それは良いことだ」といいミシエルの隣  
に席をとる。私とシンヤはサツサと飯を済ませて、外の大きな広場で朽ち果てた旧型のフィアットをバックに一枚、ミシエ  
ルの妹の赤ちゃんを抱いて一枚写真を撮る。今日は陽射しがとても良いので食欲にシャッターを切る。

彼は彼の身内に私達を見せて回りたいのだろうか。ドラマーとの約束の時間に遅れてしまう。文句をいうとミシエルは「ア  
フリカン・タイムだよ」と笑う。

ホテルへ戻ると当然ドラマーは待ちくたびれていた。おまけに彼はライトの壊れたスクーターでこのブッシュの中のホテル  
まで来ているので暗くなる前には帰らなくてはならない、という。それはもつともだが、ドラマーが帰る時間までどの位ある  
のか、とミシエルに尋ねると「十五分だ」と平気な顔をしている。そうかい、アフリカン・タイムつてのは原始人のように遅  
れて来て公務員のように帰ることなんだな。

ドラマーは私達が買った太鼓で三〇分程教えて帰る。夕闇が迫っていたし、やむを得ない。彼が教えてる間も回りに集まっ  
て野次馬していたホテルの連中が、彼が帰ると本格的に太鼓やシェケレで遊びだし、昨日に続くライヴ・パーティとなる。突  
然、緊張が走り何人かが姿を消し、何人かが仕事に戻った。オヤジが来たのだ。残ったのはオヤジの子供達だけだ。オヤジは  
私達にワーク・ショップの感想を聞き、時間が短かったという不満を聞くと、自分で太鼓を叩いて私達に教え始めた。当然、

回りから先程までの連中がソロリ、ソロリと集まってくる。私にとってはこの上ない贅沢な時間だが、シンヤにとっては「この強欲オヤジ、太鼓叩けるのか」という程度だろう。が、シンヤはワークショップに異常な熱意を示していたので、私はなんだかシラケてしまった。

オヤジが二〇分程で帰った後、再び大騒ぎになる。どうもリズムがキープできない私にトウインは「四〇%の集中力で叩け」とアドバイスしてくれた。「残りの三〇%で回りの音を聞き、後の三〇%は家に帰ってからの事でも考えていることだ。一〇〇%で叩いている時、人の音を聞いたならそれに惑わされてしまう。フジやサジェのドラマーは一晚通してリズムを刻み続ける。そのためには一〇〇%集中していたらできやしない」ということだった。彼はその後太鼓を叩きながらリズムを乱すことは無く世間話をしてみせたが、しばらくして「疲れた」といい太鼓を置いた。

トウインはこの後、友達と町で酒を飲むという。引き止めても悪いので私は部屋に戻ることにする。着替えをして水のシャワーでも浴びようとしているとコラが部屋に入ってきて「これから私達は町に遊びに行く。一緒に行かないか」というので付いていくことにする。すっかり暗くなった道をアデバヨ、コラ、ブソイ等と歩いて行く。ホテルの敷地を出ると蛍が星のように沢山いた。風情というより電飾のように物々しいホテルをヨルバ語でモノモノという。アデバヨが一匹捕まえてくれた。掌で囲ってみるとその光量は大したものだ。「これがあれば電気が要らないね」というコラ。「今夜も電気が灯かないのなら、これを沢山捕まえて来てくれ」。田舎へ遊びに来て土地の子供達と蛍の夜道を歩く。夏休みじゃないか。

「町」とは何のことはない、国道をホテルへ入っていく道の角にある一軒の店だった。二個しか無いテーブルの奥にトウインが居てビールを飲んでる。どうやら、先程の彼の言葉は私達を遊びに行こうと誘っていたらしい。友達とはホテルの連中のことか。彼の隣に居た人達が席を開けてくれた。トウインとブソイとアリヨと日本人二人でテーブルを囲む。とても全員は

店に入り切らなくて外で何か飲んでる様子。外では大きな音でフジ・ミュージックをスピーカーから流している。ホテルの連中の中には未成年も何人か交じっていて彼等はトウインに隠れて煙草を吸う。夏休みの夜遊びといった雰囲気だ。最後の夜なので皆にゴチソウすることにする。たちまち外へ伝令が回る。シンヤは煙草が切れていると行って立派な不良に見えるアリヨにお使いを頼む。アリヨは「煙草の煙を肺まで入れるのは自分だけで、他の奴はカッコつけているだけだ」とシンヤに煙草をたかる。「どいつも煙草をたかるけど、まともに吸う奴は居やしない」といつていたシンヤにとってはナイジェリアに来て初めての喫煙仲間だろう。ビールを飲み酔っぱらえば、なおさら話が面白い。

私達の夕飯を届けにガニが車で通りかかり、外の連中に止められ今夜のフリードリンクを聞きつけ店に入ってきた。しかし私達はガニの車で飯を食いにホテルへ帰ろうとしていたので清算をしようとすると、ガニはムキになって「帰りに寄って飲み物を受け取る」という約束を店の人と大声で交わし確認する。その後でシンヤはカバンから支払いのための金を取り出すのだが、カバンには大金が入っている。興味本意に開かれた連中の中でシンヤがパニックになっている。私はこれらを見て笑いが止まらなくなっている。人だかりの中から助けを求め声をするのだが、その声がまた笑いを促進する。トウインが助けに入ったのを見計らって、飲み残していたビールを未成年のアリヨの子分にやる。ボトル半分以上入っていたビールを、彼は後ろを向き一気に飲んでしまう。もう、何があっても笑いが止まらない。

ホテルの飯はどうせ食い切れないので部屋の前で遊んでいる連中に渡してしまう。部屋にいるブソイやアリヨやトウインに買ってきたカセット・テープの簡単な解説を聞く。酒のせいか、解説したくてしようがないのか、皆が同時に喋るためノートをとるのに声を枯らして話を整理する。落ち着くために煙草を一箱開けて置いておくと、数分後に吸おうと思って「あれ、煙草は？」と聞くと「誰か外へ持っていったんだろう」という。シンヤはこの時、アリヨの超早技を目撃したらしい。まあ、そんなところだろう。カセットの解説が終わり、いつものトウインとのコ難しい話になるとアリヨは出ていき、またブソイとトウ

インだけになる。ブソイは十五歳なので黙って私達の話の話を聞いている。内容が分かっているのかさえ曖昧だが、時々トゥインに向かって間違いを指摘する。客の接待役はトゥインと心得ているのか、私に直接はあまり話さない。またしても夜更かししてしまった。残りの旅程であまり使いそうもない西アフリカの地図をブソイにあげた。夏休みの自由研究に使えるんじゃないか。

九月一日（金曜）

午前七時三〇分 起床

今日はオヤジの御子息の誕生日パーティーで、ついでに私達のサヨナラ・セレモニーとして音楽を演奏してくれるので午前十時にオヤジ家に行くという。私達はその前に太鼓をDHLで送るための手続きをしなければならぬ。心配する私にミシエルは「早くに迎えに行くから大丈夫だ」といつていた。

寝ぼけながら荷物を整理する。石鹸、ライター、百円の電卓など要らないものはまとめて置いていく。トゥインに分配してもらおう。レゴスで物をやりたい奴になど出会うとは思えない。ブソイが通りかかったので部屋に呼びいれ優先的に一品だけ先取りさせてやる。アデバヨがやって来てまた「何をあげたらいいだろう？」といつているので彼が貸してくれていた太鼓のスティックを記念にもらうことにする。アリオの子分が来て「私は毎日、電気の管理をしていた。何かくれ」「よいホテルだが電気施設にだけは問題があるな」といつてもやらす追いつく。予想通りバスは遅れたが、その時間は予想を上回るもの

だった。もう十時を過ぎている。ホテルの連中が全員集まって大賑わいの中、車に荷物を運び入れる。置いていく物について皆の前でトウインに告げると尚更騒然となる。その場をシンヤに任せて外に出て事が落ち着くのを待っているとブソイがやって来て「マサト・アイ・ミス・ユー」という。こんな言葉を言われたのは初めてなので慌ててしまい、何故か照れて笑いながら逃げるように立ち去ってしまったが、豪快に笑って頭でも撫でてやるべきだった。おじさんは汚れている。もっと立派な大人になりたい。

バスがホテルを出てDHLで太鼓を送ると十二時過ぎている。「演奏はどうなってるんだ」とミシエルに聞くと「終わってるよ」と平気な答え。どーして「私達のための演奏」が私達を待たずして終わるんだ。どうせ、演奏など行われない事はミシエルがホテルへ向かう前から決まっていたに違いない。もはや慣れていて落胆もしないが、昨日から何度も「君達のために演奏をするのだから」と恩着せがましく私を恐縮させた分くらいは遺憾の念を見せて欲しいものだ。

「それならば」ということで昨日買えなかったバティックと、もう少し太鼓を買い足すために楽器屋を訪れることを要望する。がまたしても、とりあえずオヤジの家へ。「何のために」と聞くと「さよならを言うため」だそうだ。ガニがヤギをさばっている前を通り三階のオヤジの部屋へ行く。オヤジが待っていて、私達各々に先日高くて買えなかった二〇〇〇ナイラの服と彼のレコードをプレゼントされる。ちよつと信じられないが、すごく嬉しい。

ミシエルの家に寄って奥さんのフォラを乗せてレゴスへ向かう。私達の要望はやはり無視され、特にバティックは滞在の間じゅう言い続けていたが叶わなかった。そのミシエルが「そのプレゼントは私がセヴン・セヴンに頼んで頼んで君達に贈らせただ」というけど、どの程度信じればよいのだろうか。どーでもいいけど。



雨の中を四時間程度の旅。途中のハイウェイ沿いの店で、笑ってしまいう程でかいヤムイモを大量に買う。伊豆に行ったら鱈の干物を買うようなものか。車中、ミシェルは現金を望めないこの日本人にインヴェイション・レターを日本から送ることを固く固く約束させた。この執拗さこそは私がバティックを買うために足りなかったものだろうか。彼はビザの申請書のコピーまでをも私に見せたが、そこに移った顔写真は真っ黒で目鼻の区別さえ難しい。反射的に「なんだコリヤ。真っ黒で全然分らないじゃん」と爆笑した私をシンヤが後から「あんた、容赦ないねえ」と咎めた。差別というのは多数が小数に対して行うものを指すのではないか。

夕刻、レゴス着。今後、ドルフィンのお世話になると決めているわけではないので「エアポート・ホテルまでいいよ」といつてみたが、予想通りドルフィン・オフィスへ到着。こんなカモを手放すはずがない。ミシェルがバデボに五〇ドル札を何枚か渡すのを見た。ババが駐車場で待っていた。「どーしてオシヨボから電話をくれないんだよ。俺のこと忘れちゃったのかい。昼からここでずっと待ってたんだよ」と今後を予想させる、白々しい恩着せ攻撃。

ミシェルは紙に「私の仕事は終わった」と書いてみせる。ババと違い奥ゆかしい終わり方だ。私達はドルフィンのオフィスが入っているパレス・ホテルのロビーに入ってババが紹介するフェミの友人だという男と挨拶を交わした。彼はこのホテルの一室にオフィスを構える建築設計事務所でアルバイトをしている、建築家志望の学生だ。とても悪いことを企んでいそうに見えるが話してみると以外にも誠実そうな青年だった。フェミに会わせてくれるという。と、ミシェルとフォラを下ろしたバスが運転手だけを乗せてホテルの玄関に止まり私達を呼んだ。一瞬、誰だか分からなかったが金を返そうとしているのでオシヨボからの運転手だと分かった。シンヤがミシェルにチップとして渡した金が彼に渡り、要らないと言っているのかと思い「いいから取っておけよ」というとピジーイングリッシュで何か言っている。ババが「彼はもつとくれといっているんだ」といい、

ホテルの玄関前での痴態を避けるため私だけを車に押し込みバスを走らせた。ミシェルとフォラがバツ悪そうに立っているのが見える場所で、運転手にいくらかやって再びホテル前の玄関まで送ってもらおう。

建築設計事務所を少し覗いてからホテルの最上階へ。広いフロアに秘書らしい女性が一人いる。促されるままにソファに腰掛けるとババと学生は出ていってしまう。どういう展開か理解できないまま秘書らしい女性とオーム真理教事件などの世間話をする。ババが何を企んでいるのか分からないので話を切り上げようとする、彼女が「屋上へ出てみよう」という。屋上でレゴスの夜景をバックにシャッターを切る。

今度の運転手はタジュではなくジョンという男で、彼は先程セヴン・セヴン・ホテルのバスが駐車場に止めてあるとき後ろから来て、車をぶつけた男だ。パレス・ホテルに泊ることを推されることもなく、エアポート・ホテルへ向かう。

また、仕事を終えたババの恋人を送る。二人の関係は先週より悪化しているようで、彼女はかなり怒っているようだ。あまりに深刻な車内の空気にいたたまれなくなって「どうしてたら良いのか分からないんですけど」というと、ババは「外でも見てろ」。カチンときた。こっちは客だぞ、値引きしてもらったけど。先週は「彼女を車に乗せたことをバデボには秘密にしてね」とかいつて可愛かったのに、調子にのりやがって。「バデボにチクっちゃおうか」とシンヤと相談する。しかし「根に持たれてシユラインで待ち伏せでもされたら恐いしね」となる。実際、短気で巧妙なこの男なら、人を使ってもやりそうだ。以前、彼の実家というのを見た時、町並みや家屋から育ちが想像できた。バデボにしてみればシユラインのガイドに最適だったのだろう。

途中でアーミーの検問に出会う。やはりオショボの検問とは緊張感が違う。ババが金を渡すことを嫌うとトランクの荷物を空港の税関並みに細かく調べる。ババが「その服どうしたんだい」とドルフィン駐車場で既に答を聞いたはず質問を繰り返

す。「今日セヴン・セヴンが私達に贈ってくれたんだよ」「えーっ、あのミスター・ツインズ・セヴン・セヴンがあー」白々しい芝居はアーミーに何の効果も無かった。

ホテルの駐車場で三〇センチ程のパイロン代わりの石で車の腹を擦り、ジョンはババにボロクソに怒られる。なんでこんな奴に運転免許を与えるんだ。

フェラまでの数時間をホテルのレストランで過ごすことにする。どうせ、ババは時間通りに来やしないだろう。エアコンとシャワーでリッチな気分になったのでホテルのレストランへ行き椰子酒をボトルで頼み、シンヤは久々の洋風デイナーを楽しむ。ボトルが半分空いたところでババが入ってきた。「何をしてるんだ。時間だ。早く行こう」予想外な仕事熱心さに敬意を示し、食事半ばでレストランを後にする。ババは見たことの無い女を連れている。着替えるために部屋に戻ると、以外にもババはシンヤにシャワーを浴びる時間を与えた。その間、そのデカイ女の足を触ったり甘い声で囁いたりサービスのサービしながら私に「へっへっへ、この女は見たことないくらい、黒いだろ」。確かに茶色ではなく濃いグレーで表情が無い。商売女かもしれない。シンヤがシャワーから出るとババは「さーて、俺もシャワー浴びるか」とバスルームに入っていく。あれ？と思つてすぐ、ムカツときた。さつき私達を急ぎ立ててレストランを追い出したのは、この女を待たせていたからだつたのだ。この間にもジョンは車でずっと待っているのに。

シュラインの店員は私達の顔を覚えていてくれて「よー、また来たかい、良い客だな」と握手する。握手を離す時、指を鳴らす。これナイジェリアン風。私のはビチ、彼のはパキン。

十二時過ぎた頃から四時近くまでババは女と消えていた。シンヤはこれに気付き「俺達の部屋の鍵、車の中だよな」と嫌なことをいう。さすがに腹に据えかねて、ジョンに小銭を渡して捜しに行かせると二〇分程して戻ってきて「ババ居ない。女居

ない。車無い」といって大笑いする。「そーか、このことはババには黙っている」証拠をつかんだ事で私も大笑いする。バデボにチクツてやる。私は寛大な方だが酒席を邪魔された恨みは忘れない。

ショウが終わる頃、ババは戻ってきて、なるべく平静を装う私達の顔色を察したらしく、不自然に盛り上げて私達のご機嫌をとる。指でチンポを作り腰をフリフリ近づいて来る。シンヤが「こいつ雰囲気読むねえー」と感心する。どーでもいいけど煩わしい。

帰りの車でシンヤが爆発する。助手席のババの椅子をガンと叩いて「オマエはガイドだろ」と怒鳴る。感情的に怒りの言葉を並べるが、ババはムツとしながら「マサト、シンヤは何を怒っているんだ」と説明を乞う。ババは都合が悪い時、こちらの英語が分からないふりをしたり、故意にヨルバ語を混ぜた分りにくい英語を使ったりする。「オマエはガイドなのに、ずっと居なかったことをシンヤは怒っているんだ」「いや、俺は別の場所にずっと居た」。ここでジョンが「俺はババを捜しに車まで行ったんだよ。車で女とフケたんだろ」。すると「俺は車を移動して休んでいたんだ」とピジーで答え、その後私に「車で休んでいたんだ」と説明した。彼はこの白々しい言い訳をバデボの前でも押し通すだろう。私達は手持ちのカードを早く切りすぎた。女の前でカツコをつける必要もあつたのだろう。「俺はシンヤとはもう話たくない。マサト、オマエも怒っているのか」というので「オマエはガイドとして雇われているのだから、消える時は一言あつても良いはずだ」と理性的に処理する。疑いを掛けられて怒っているのは男は「部屋まで送る必要は無い」という私達の言葉を押し切つて付いて来た。

幸い、香取線香の火が消された様子は無かつた。ババは香取線香を炊いた部屋に長く居ると鼻が痛くなるのだ。彼は切り出した。「私は昼の仕事で疲れている」（それは私達の関知する所ではない。）「タジュのようにドライバーは休めるが私はずっとお前達に付き合っているのだから大変だ」（私達がオショボに居る間、どうしてたんだ。）「今夜、疲れ果てた私は車

の中でパレード・エクストラを飲んで休んでいたんだ」(こんな夜中に薬局が開いているものか。)  
「女は別の場所でショウを見ていたんだ」(ジョンは二〇分も捜し回ったんだぞ。)もう、何をいっても無駄だと思い「日本の考え方では、君が疲れていて職務を遂行できないのなら、バデボにいつて交代を頼むのは君の責任だ」というと、両手を前に組み「貴方たちはガイドを代えてもらいたいか」と泣きそうな目で私達を交互に見つめる。「あらら、前で手え組んじやったよ、この人は」と指摘すると、シンヤは「バーバーあ」といつて彼の手をとった。シンヤは外見は豪傑に見えるが、A型で末っ子で(隣の家の)おばあちゃん子なのだ。

六時就寝。

九月二日(土曜)

午後二時 起床

昨日のハードスケジュールは今日という暇な一日が待っているからムリできたのだ。心ゆくまで寝た。ホテルの向かいの小さなファースト・フード店「チキン・ジョージ」で朝食。雨の町を眺めながら、ゆっくり時間をかけてハンバーガーやソーセージ、ミートパイを食べ、緑のボトルの生ビールを飲む。散々ねばって店員にチップをやらなかったせいか、清算が終わると煙草を咎められた。ホテルの中の売店でビールやお菓子を買い込み、部屋へ帰る。シャワーを浴びてダラダラしていると雨が止んだので、近くの市場を散歩することにする。

先週、ちよつと恐そうな雰囲気を警戒して、表口でミネラル・ウォーターだけを買って帰った市場だ。三メートル四方位の日用雑貨の店が升の目ようになって延々と続く。通路は一メートル位の幅で真ん中にドブが流れている。バティックの店は無かったが床屋を発見する。時間があつたら行こう。旅先で床屋に行くのは私の楽しみだし、髪の毛はヨルバ人にブッシュ・ヘアーと呼ばれる程伸びている。シンヤがバッグ用に小さな鍵を買う。面白い形が沢山あつたが全て中国製なので土産にはならない。「ミネラル・ウォーターあるよ」としつこく騒ぎ立てるオバチャンに「要らないよ」というと「そう」と簡単に引き下がり拍子抜けする。

こんなにダラダラ過ごせる日はもう無いだろう。旅行も終わりが近づいているのだが実感が無い。オショボで蚊にさされた部分が腫れてきた。足首の回りだけ、片足だけで十三ヶ所刺されている。かゆい。

二十三時、ババ来る。「これは君達の責任では無いのだが」と切り出した。「オショボで預かったはずの金が七〇〇ナイラ足りないんだ」「何でだよ、ババも俺もちゃんと確認したろ?」と釘を指すと「そうなんだよ、だから君に責任は無い。バデボには俺のサイフから払うつもりだ」。少し安心して「どうして足りなくなったんだ?」と聞くと、いい難そうに「バデボはタジュが盗んだんだといっている」という。それでオショボ以来、運転手がジョンに代わったのか。でも本当かな?とおもう。タジュはその日、私達のバデボへの直訴によってオショボまでの運転手を任されたのを目の前で見ているし、そのことを、とても喜んでもいた。しかし、ババとタジュは友達同士だから、ババがタジュを落とし入れるとも思えない。ウムム……。

今日は女ではなく、ババの親戚という青年が一緒だ。最後のフェラ・クティなので中央の椅子でしっかり聞いた。前に双子の美人が座っていたが、ごつい男連れなのを知らずにババが声をかけた。ガイドが面倒を起こさないように客が気を使ってい

る。ばかばかしい。先週、見て凍り付いた宗教的な儀式を今日も見ることが出来た。毎週日曜にやってるんじゃないか？。先週ババは「あのアクトは数ヶ月に一度しかやらないんだ。ラッキーだったな」といつていたのに。

ショウが終わるとジョンに運転させることなく車を乱暴に走らせた。立体交差の下を逆走して対向車に「気違いか、おまえは！」と怒鳴られたのに「ソーリー」とクールに答える。ホテルについて「明日、おみやげを買いに行きたいんだけど」というと「明日は日曜。市場は休みだ。夜、フェミのショウが始まる前に迎えに来る」と投げやりな返事。「じゃあ、オルモ・ロックにしよう」というと「オルモ・ロックは遠すぎる。このガイド料では行つてはいけない、とバデボが言っている」なんだか取り付くしまが無い。この時点で、なんじゃ、こいつは、と初めて気がついた。何をだか分からんが、やたら怒っている。シンヤが「あいつ、きつと昨日の女に振られたんだぜ」という。言われてみれば思い当たる点はあるが、何で私達がとばかりを受けるんだ。考えれば、やはり腹がたった。値引き価格とはいえ私達は一日分のガイド料を払っているんだ。オルモ・ロックと買物物を一日ずつ取ることは前から話していたことだ。日程を計画するくらい、してくれていると思つていた。事前についてくれれば、市場を日曜以外の日に割り当て、オルモ・ロックのために特別料金を払うとか、ホテルの旅行会社を利用するとか考えることができたのに、こんなふう突然宣告するなんて。フェラ・クティが好きでナイジェリアまでやって来た私はフェラが崇拜の対象とするオルモ・ロックを是非見てみたかったのだ。

九月三日（日曜）

ババのクソ野郎のせいで五時にフェミを見に出掛けるまで、自由な時間ができた。市場の前にある夜は生演奏を聞けるレストランでユックリと昼食。ビール、コーク、フライド・ポテト、鳥肉の料理と飯。八九五ナイラ。この後の計画をだらだら話す。

ホテルに戻るとホテルの従業員が紹介するタクシーへ。料金の交渉をしてタクシーへ乗り込むと、エアコンが無く、窓が開かず、異様に臭い。三重苦というやつだ。まずは昼間のシュラインへ。昼間は不良の溜り場であることは雑誌で読んで知っている。目的はフェラのビデオを買う事にあるのだが、観光気分も確かにある。外からでは営業中なのか準備中なのか全然分からない。色々声をかけてくるシュラインの前にいる不良少年の一人に「ビデオを中で買えるか」と聞くと「あるよ、あるよ」と怪しく元気に中へ連れて入ってくれる。

扉を開けると、いきなりラストの男が両手を広げて「ウェル・カム」。ルイジアナの白人だったら反射的に撃ち殺しているところだ。恐る恐る店内を見渡している間に不良少年が「シュラインのマスターだよ」という男を連れてきた。ショウの時並べられていたプラスチックの椅子は重ねて積み上げられ、その空いた所に木の長椅子を置いて沢山の不良大人達が座談をするでもなく（たぶんハッパを楽しみながら）座っている。奥へ通され薦められた席に座るとコーラを持って来てくれて商談に入る。ビデオを一本買いに来ただけなのだけれど。最初、提示された七五〇ナイラを五〇〇ナイラまで負けさせて手を打った。その間もシンヤと「こえーよー」「すんげえ、おつかねえ」などと笑いが止まらないのは本当に緊張しているせいだろう。マスターと不良少年に五〇ナイラづつのチップを渡し「もし、写真を撮らせてくれたらもつと渡せるんだけど」ともちかけると少し考えてから「この連中の中には写真に撮られるのを嫌う者達も居る」という。無礼な申し出に恐縮して「いいんだ、いいんだ、済まなかった」と席を立つ。マスターは「今夜のショウで会おう」と私達を送り出す。私は気付かなかったが、シ



ンヤはこの間に二枚のシャツターを切っていた。使い捨てカメラはここでは未だ普及していないので、私のオリンパス・ミューより都合がいい。帰りに見た、山のように積まれたハツパを仕込むオバチャンが静岡のように長閑だった。

タクシーへ戻ると運転手が心配して捜しに来るところだった。「待たせたね。心配したろ」といって次は楽器屋に向けて走り出す。欲張りな私達はまだ、太鼓が欲しいのだ。楽器屋は運転手が知っていると云ったのだが、市場の中で通行人に何度も場所を聞いている。結局、両側に出店が出ている人通りが多い狭い道路で無理矢理Uターンをしてホテルに帰ってくる。

運転手と値段の交渉に立ち会ったホテルの従業員は居なかったが、シュラインまで四〇〇ナイラ、楽器屋が見つければ四〇〇ナイラで合計八〇〇ナイラの約束だ。「楽器屋が見つからなかった以上、四〇〇ナイラしかやらん」という私に運転手は楽器屋がある所までは行った。今日は休みだったんだ」と主張する。延々もめている私達を見かねてガードマンがやって来て仲裁に入ってくれる。彼にめんじて、六〇〇ナイラの妥協案を出すと運転手も了解した。ガードマンに札をいって部屋に戻る。私はこの手の交渉が好きだ。楽しんでる。彼等にとっては安くない金なのだろう。悪趣味かもしれない。

五時に迎えにくるはずのババが来ないので、放っておいてシュラインへ行くことにする。ホテルの前でタクシーを捕まえて裏を回ってシュラインの近くで降りる。昼のシュラインを訪ねたのと時間が早いせいで、フェラの時より緊張感が少ない。開場はしていたが客は私達だけでバンドはリハーサル中だった。フェミがステージの回りをウロウロしている。真正面の一番前の席を取る。便所に入るとフェミのバンドのダンサーの女性がズボンを上げながら出てくる所で「あ、ごめんなさい」というと「男便所はこつちだ」と愛想よく教えてくれる。最初にシュラインに来たとき私はこの女便所から男性客が何人も出てくるのを見て私もそこで小便をした。水の流れない便器には汚物に交じって整理用品も確かに落ちてはいたが、ドアも便座もない

この便所が女性用とは思わなかった。その時、私が小便をした後シンヤが入ったが、すぐ出て来て「とんでもなく怪しいサンガラスの男達が何人か集まっていた」とても小便をできるムードではなかったらしい。でも、とにかくそこは女便所で、奥にあるため気付かなかった男便所は公園によくあるような、壁に向かって小便をするとその下の溝を通して流れていく形式のものだ。ただ日本と少し異なるのはとても暗いことと、背後にある大便用の便所のドアが無いことだ。小便をしながらふと気配を感じて後ろを見ると暗い便器に黒い影がしゃがみ、二つの眼が光って私を見ていた。

バンドがリハーサルをしている間、ダンサーの一人(たぶんフェミの姉)とフェミが談笑しているところに行って少し話をする。別れ際にジャガタラの「南蛮渡来」をプレゼントすると「是非、聞いてみるよ」といつてくれた。十年以上前に自分のオヤジに影響されて、遙か極東でできた音楽を彼が気に入るとは思ってはいないけれど、私の気持ちはとても満足することができた。「ショウを楽しんでいつてくれ」と握手して別れる。なんて、すがすがしい男なんだろう。カッコ良すぎる。

客が数人集まった所でバンドの一人が「じゃあ、始めようか」とメンバーに声をかけてステージに登る。ベースが「Theory of Togetherness」のフレーズを弾き始めると徐々に音が重なってくる。管楽器が順番にソロをとる。フェラも飛び入りして十分程サックスを吹いた。客席も六部程の入りになったころ、フェミが入って曲が始まる。四十分もあるイントロだ。一時間以上上たつてババがやって来る。ムキになって怒った顔で「何で俺に黙ってシュラインに来るんだ。危険じゃないか。バデボに怒られちゃうだろう」とまくしたてるが、フェミのステージから眼を放せない。なにいつてんだ、この野郎。てめえが遅れるから悪いんだ」と思いつながら「OK、OK、バデボには黙っておくよ」とババを静める。

前回と変わらずショウは最高に素晴らしかった。ダンサーのカッコ良さに誘われてはステージ下のフロアで踊り、席に戻ってはサックスの骨太い説得力に圧倒された。

ジョンが運転する車での帰り道。道端で大声で騒ぐ声が聞こえたと思うと急ブレーキ。対向車線の方を見ていた私は何事かと思つて前を見ると、フロント・ガラスに映画のようなシーン。アーミーが車の正面に巨大な銃をこちらに向けて、今にも引き金を引きそうな格好で立つ姿がヘッドライトに照らされている。と同時にドアが外からバンバンと乱暴に叩かれ、ジョンは鍵を開けると同時にドアの外へ文字通り襟首をつかんで引きずり出される。ババはいつものフレンドリースマイルを全開にしたが、やはり乱暴に引きずり出されてしまう。どうやら、ジョンはアーミーの検問に気付かず、突破しそうになつたらしい。怒つた時の彼等はやはり、金をせびる時より数倍怖い。私の席の窓も下ろさせて、長い銃口で「そのカバンを開ける」と命令する。シュラインからの帰りだというのが災いしたのだろう。マリワナを捜して床のマットの裏や靴下の中までチェックされる。何も見つけられないと分かると、次はワイロをせびりだす。「私の金は危険だから全部ババに渡してある」といつて逃げる。

しばらくたつてババとジョンが開放されると、私達についていたアーミーも消える。が、今度はババとジョンがケンカを始めて止まらない。早くこの場を立ち去りたい私達の気持ちを他所にババはジョンをボロクソいい、ジョンは一度かけたエンジンをもた止めてしまい長期戦の構えを見せる。ババは怒りをそのままに「もう、いいから行け」を繰り返し始めた。

ホテルに戻つてから晩飯のドドとビールを、ババを通じて車で待っているジョンに買ってきてもらおう。こういう場合の妥当な額を判断できるようになつてきた。ババとジョンに各々いくらずつ位ハネられるかも想像と大きくは違わないだろう。

九月四日（月曜）

「アフリカン・タイムじゃなく一〇時ぴったりだ」と言ったババが一時三〇分によってきた。昨夜の検問のせいか、運転手はジョンから再びタジュに代わっていた。相変わらずシヤイに笑っているが、その足元には誇らしげに金色のサンダルが光っている。消えた七〇〇ナイラの件が頭をよぎる。なにもこんな時にサンダルを（しかも金色の）新調しなくたっていいじゃないか。潔白だから出来るのか、あぶく銭だから買えるのか。さっぱり、わからない。

私達はガイド代の清算をするためにドルフィンのオフィスに向かう。T Cを直接ドルフィンの銀行口座へ振り込むため、シヤと經理の女性と運転手のタジュと私の四人で渋滞の町を銀行へ向かう。

予想はしていたが、あちらこちらを歩き回り、別のフロアだといわれ、別の軒だといわれ、偉い人の個室に通されハンコーつもらわずに次の手続きへ回され、ようやく支払いカウンターへ。ここで私達は支払額に勘違いをしていたために、もう一苦労してしまった。經理の女性がバデボに電話をかけてくれる。私はバデボに支払額のクレームを説明しながら、私達のサイフの残金が多過ぎることに気が付いた。とりあえず、彼等の主張は合っていると直感したので、バデボの説明に納得したふりをしてシヤにT Cを切らせる。

この後、よーやくオショボから求め続けたバティックを買いに市場へ行く。なんとバティックはオショボの名産でレゴスで一部の地域で売っているだけだった。普通の市場では売っていないのはこのためで、着いたバティック専門市場は両側に沢山の店が並んでいる。經理の女性は買い物のおバチャンと化し、店員との値引き交渉してくれる。素晴らしい生地が並んでいるが、柄がでかくてシャツにもパンツにもなりそうにない。一枚一枚がアフリカ全体そのものといった感じで、切り取る

事が難しそうだ。アフリカの人はこの五フィートの生地を二つに折って、両端を縫い折り目に丸い穴を開けてそこから首を出して着るのだ。両手を九〇度に上げると生地はそのままの模様を表せるわけだ。

ドルフィンのおフィスに戻る。車に乗るためおフィスを出るとババが寄ってきて「七〇〇ナイラを少し手伝ってくれないか」という。ほら、来たとおもう。「昨日、全部自分のサイフから出すっていったじゃないかよ」などと、しばらくゴネてみたが、同じ七〇〇ナイラに対する両者の価値が違う。価値が違えば執念が違う。勝ち目の無いゲームで結局、七〇〇ナイラすべて巻き上げられる。こういう時に強靱な体力と精神力があれば乗り切れるのだが、それを惜しんで、たかが七〇〇ナイラと簡単に払ってしまうと、次は七〇〇〇ナイラを賭けて戦わなければなくなる。金も力も無い人はこの二つの間に妥協点を見つけれぬのだ。

バデボも一緒にホテルへ帰る。バデボは社長だけあって聡明でいて愛敬もあり、ババには聞けない政治や経済、民族問題の話を解りやすく聞かせてくれる。ハイウェイから「バイバイ、ナイジェリア」といいながら夕陽を何枚か写真に撮る。

結局、支払いをして三〇分程買い物をして終わってしまう一日だった。渋滞と銀行の手際の悪さに一日分のガイド料を払ったようなものだ。

ホテルに戻り、近くの夜だけ出店が並ぶ通りへ飯を買いに出る。ホテルの駐車場を出口に向かって歩いていくと長身の男が親しげに声をかけて来る。明らかに彼は私達を知っていたが、私は彼が誰だか思い出せない。が、会話を交わすうちに、彼は昨日タクシーの運転手と口論している時に助けてくれたガードマンだとおもう。私服だったため分からなかったのだ。「何処

へ行くんだい？」「その通りに晩飯のドドを買いにいくんだ」「危ないから付いて行ってやるよ」。ドドを買っていると、いつの間にか彼の脇に若い女の子が一緒に歩いている。帰る道すがら、彼は彼女を「妹だ」と紹介する。

ホテルに着くと女の子だけが私達の部屋にやってきた。廊下で別れる時、男が彼女にそう促したのだ。屈託なく笑う無防備さと色気の無さからして娼婦ではなさそうだが妙な展開だ。何を考えているのか知らないが、私達は腹が減っていたし、ドドは二人分しか無い。それに明日の出立の準備をしなくてはならない。少し話をした後「悪いんだけど、明日の準備があるんだ」と桜の模様の桃色の手拭いをあげると、喜んであっさり帰っていった。シンヤが「あれ、誰だか思い出したの？」「昨日のガードマンだろ」「え？違うよー。あれとは別人」確信に満ちている。そういえばガードマンがホテルに妹と部屋を借りているのは変だ。

「なんだったんだらうねー」様々な推測をしながら荷物を整理してシャワーを浴びようとするのとノックの音がした。あの兄妹だ。来たものはしようがない。中に招きいれ話をする。彼はギニアから仕事でやって来ている自動車エンジニアで、連れの彼女は友達の妹で、レゴスへ遊びに来たのだという。どうも作り話っぽいのが、男は紳士的だったし女の子は無邪気だ。即、追いつくのは悪い気がする。レゴスは安心できない町なのは良く分かったが、疑心暗鬼になって良心的な人に対して閉鎖的に振る舞うのは良くないよね。好きで訪ねた国なのだし、どうせ取られて五〇〇円程度なら、という話をシンヤとしていたばかりなのだ。彼女は当然のように冷蔵庫からジュースを出して飲んでいる。私が「明日でチェック・アウトだから、あまり入ってないだろ」というと男が「俺の部屋に行こうよ。ビール一杯あるよ」と誘う。決して悪い人達ではないのだが、折角のドドがもう冷えてしまう。男が気を使い「そろそろ、私達は帰ったほうがいいかな？」というので「ごめんさい。出発の準備で荷物を整理しなくてはならないんで」と帰ってもらおう。親交の証しに、余って要らなくなったシャンプーやTシャツをプレゼントすると彼女はキャツキャツキャツと喜んで可愛い。

九月五日（火曜）

待ち合わせの十二時にババはやって来なかったが、チェック・アウト時間は待つてくれない。私達が勝手にチェック・アウトしてロビーのフラミンゴ・バーでコーラを飲んでいるとバデボがら連絡があり一時間遅れるという。これ幸いと私達は残ったナイラを使うためレストランへ行く。今夜レゴスを発つ私達にはもう余分なナイラは要らない。ナイラは国外へ持ち出し禁止だし、両替などもちろんできない。昼からメニューにある高価なワインを頼む。オショボに行く前にこのレストランに来たときはメニューを見ただけで尻尾を巻いて帰っていった日本人がだ。ボーイが少しだけグラスに注ぐのをもったいぶって口に含み「OK、ベリーナイス」などと格好つけて答える。

一時三十分、ババ来る。運転手はタジュ。今日は最後の買い物をして夕方に空港へ行く。買い物のための大きな市場を目指してレゴスへ行くはずが、最初にフェラのシュラインの事務所へ行く。ババは私達を車に残し十五分程でカセットを持って戻ってきた。私達とドルフィンとの契約には、私達が見た日のシュラインのライブのカセット・テープ代が含まれている。オショボに発つ前から、会うたびに早くよこせと言いつけてきたのだ。ところがババが戻ってきて私達に手渡したカセットはかなり昔のもので、後から聞いてみたらレコードのノイズさえ入っている。「ほら。カセットだ。俺はウソはつかないぜ」と得意そうにしているババに「私達が見たライブの物じゃない」と文句をいうと「レコードにする前の曲は売らないんだそうだ」「それは有名な彼のポリシーだ」「そう、彼のポリシーを理解してやってくれ」。知っていたから期待したんじゃないか。

車は今度こそマーケットに行くはずが、初日のオバの祭のビデオ・テープをダビングしてくれている金持ちのオヤジの家を訪ねる。彼のリビングでコーラをもらい一緒にビデオを見る。こうしている間にも買い物の時間は少なくなっていく。「ダビングの最中なのか」と聞くと「いや、終わっている。今は見ているだけだ」という。なんのこっちゃと思いつつもテープが終わり席を立つとき、ババが「ダビングと飲み物のお礼を言え」というので一応言ったが、考えてみれば私達は頼みもしなかったビデオテープ代を既に払わされているし、何時間かしか残っていないアフリカでの時間をこんな所で潰された。考えてみれば腹が立つのだが、アフリカの地を踏んでから考えることができない。ババの催眠術にかけられてしまったようだ。

延々と続く渋滞の中をマーケットへ。着いた時には「買い物の時間は三十分間だ。そうしないと空港へ間に合わない」という事になっていた。マーケットは煙草屋くらいの小さな店が延々と縦横に続くワクワクするような場所で、オミヤゲ関係の店も多くある。ババが値引きの交渉をしてくれるのだが、散々交渉したあげく「この店は高い。だめだ」と立ち去ってしまう。最初は珍しく前向きな仕事振りだと思っていたが、ハッと気が付いた。私達がここで使い切れなかったナイラは全てババのものになるだろう。奴はここで買い物をなるべくさせない気だ。そう思った時にはもう遅く、ババは「早くしろ、もう行くぞ」と私達をまくしたてている。やられた、と思い悔し紛れに欲しくもない帽子を一個買う。

空港に向かう途中に寄ったガソリンスタンドではガソリン代を出せと迫られる。旅行も最終局面を迎えると、ここまで図々しくなるか。もう大声で渡り合う気力も無い。どうせ残りの金はこのクソ野郎のものになるのだ。それより今夜の出国審査に備えて体力を温存すべきだろう。私の行動に敏感になっているババが「今、何してきた」と聞く。「イシコロを拾ってきたんだよ」。友達が「その辺に落ちているものを何でもいいからオミヤゲに拾ってきて」と言っていたのを突然思い出したのだ。



結局、五時空港にチェックインするまで私達は三十分しか有効な時間を持てなかった。ほとんどの時間を渋滞で動かない車の中ですごしたのだ。実は今日の分のガイド料は勘定に入っていない。先日、当然のように請求してくるババに「じゃあ、その日はガイドは要らない。自分達で空港に行く」と突っぱねたら、翌日バデボが「出発の日はタダでいい」といつてくれたのだ。買い物の三十分一日分のガイド料を取られるところだった。

空港の直前で無念にも使い切れなかった残りの約五〇〇〇ナイラを手渡すと、ババは物凄い手つきと目つきで金を数えて後部座席の足元のシートの下に隠す。彼もまた空港内に現金を持ち込み、警察に巻き上げられるのが恐いらしい。これから始まり飛行機に乗るまで続く緊張感を思いウンザリする。

空港の入り口に私達を招き入れたババは係員に見つかり、襟首を持って外へ引きずり出される。見送りも何もあったものじゃない。襟首を引っ張られながら、すれ違いざま私に「マサトはガブリエル以外に英語を一切しゃべるな。全然わからないフリをしてシンヤに全部しゃべらせろ」と耳打ちする。なんとも慌ただしい別れになったもんだ。航空カウンターと中で待っている約束をしたガブリエル（ドルフィン）の空港専門のスタッフ）を捜す。空港に群がるハイエナのような一般人をシャットアウトしているだけあって中は少しは落ち着いた空気だ。でも今度は制服を着たハイエナがウロウロしている。入国時の緊張がよみがえる。ガブリエルは私達をすぐに見つけてくれた。航空カウンターの前に荷物を置いて順番を取る。一番なのは当たり前のこと、私達の乗る飛行機の出発時刻までなんと七時間もあるのだから。荷物が見える位置にスナックのカウンター席を取

る。席は取ったが椅子が壊れている。棒が突っ立っているだけで座る部分が無いのだ。シンヤと私は航空カウンターが開く出発二時間前までの五時間を思い、その棒と化した椅子の回りにチーマーのようにへたり込んだ。飲み物を買うナイラさえ無い。空港内は冷房が無く、熱気と緊張で汗が流れる。

ガブリエルは空港の制服を着た男を紹介してくれる。有り難いことだ。ガブリエルは空港内で顔が効くようだ。よし。どういう理由か私達と距離を置いて立っているガブリエルのところに行つて「ガブリエルさん、あなたの会社のババに五〇〇〇ナイラ渡しました。運転手のタジュとあなたとババで三等分してください」「オー、やつはつは、さーんきゅー、さーんきゅー」握手、握手。ザマミロ、ババ。と思つていたら、そのババが現れた。どこからかワイロを払つて忍び込んできたらしい。初めて見た時のあの笑顔でタジュも一緒だ。「ババ、ガブリエルがあの制服の空港の人を紹介してくれたよ」「奴とも英語はしゃべるな。マサトは一切、話をするな」。

一時間程でチェックインが始まる。搭乗まで五時間以上あるが、まあそういうもんなんだろう。列をなしたアフリカ人の先頭をきつて航空カウンターへ。荷物を預ける所で警察のチェックが入る。荷物をさんざん調べた後でお決まりの「何かくれ」が始まった。「飲み物をおくれ」までいつている。おまえらにはプライドというものが無いのか。私は一切喋らない。シンヤが話を聞くが要領を得ないので「こいつは英語が喋れないのか」とガブリエルに警察が聞くと、先程紹介された制服の男が「こっちの奴は喋れる」と私を指した。この野郎しらばつくれやがって、と見下ろしながら「きやん・ゆう・すびーく・いんぐりつしゅ?」。へへへ、バレタかつと「あ・りとるん」。くそばかやろ、おまえらなんかに一銭だつてやるもんか。

チェックインが終われば後は出国審査。ここでドルフィンの連中ともバイバイだ。ババはシンヤから獲得したサングラスを外して「見ろ、俺は悲しくて泣いてるんだ」と潤んだ眼を見せる。徹底してインチキな野郎だ。タジュは航空カウンターから

ゲートまで歩く数分間さえ「何かくれないか」とシンヤにたかっている。こいつには少し前にババの眼を盗んで（どうせババは五〇〇〇ナイラの大半を自分の懐へ入れるだろうから）五〇〇ナイラ渡してやったのに。やはり七〇〇ナイラの犯人はコイツだったのか？この後の憂鬱な審査を思い「役立たずっ」と八つ当たりしながら笑顔でババ、タジュ、ガブリエルと別れの握手をし「バイバイ」っと手をふりながら奥の部屋へ入っていく。

空港税三五ドル（！）を払う。自国の通貨が信用できないのか、ナイラは受け付けない。シンヤを先頭に出国審査へ。悪魔が手招きしている。「How are you doing, Today?（こんにちば）」反射的に出る返事を飲み込む。「ナイラは持っていないか」そんなクソみたいな通貨を持ち出すもんか。「おーる・ないら・あわ・とらべる・えーじえんと」とシンヤ。「ドルはないか」「ノー」とシンヤ。全然持って無いわけじゃないか。「何かくれるものは無いか」。面倒になったので、かぶっていた市場で買ったばかりの帽子を指して「これやるよ」というと「ノー、それは持っている。そっちのをくれ」とシンヤのビブラ・ストーンの帽子を指した。ココロザシの低さに敬意を表してマルボロを一箱くれてやる。

次はセキュリティ・チェックらしい。四角いエックス線の荷物検査らしき物が置いてあり、その前に女性の係員が立っている。シンヤを先頭にそばまで行くとその箱は装置などでなく、ただの箱だ。係員はすぐ隣の壁の方を指差している。高さ四〇センチ、幅二メートル程度の穴が壁に開いていて、その中に机を並べて暗い中に二つの黒い顔が並んでいる。「パスポートを出せ」パスポートを出すと「一〇〇ドル出せ」出すかいそんなもん。「一銭もないのか」「のーのーのーまねー」。あまりにもしつこいので「もう日本に帰るだけだから金は持つてないっていえば？」とシンヤに助言すると「帰るだけって何て言うの」と聞く。イライラして「英語で教えられるわけねーだろうが」と言い終わる前に、シンヤの緊張の程が想像できて笑いだしてしまう。緊張した空気が笑いに変わったら止まらないものだ。シンヤの肩を叩いて笑うと壁の中の黒い顔も笑った。こ

うなればOKは間近だ。結局、目の前の謎の箱を利用することもなく通過。なんのチェックだったんだ？金を巻き上げるために無意味なチェックポイントを増やし、もっともらしく見せるために妙な箱を置いたのだろうか。

小さな免税店と二階に（大きそうな）カフェのあるフロアに出た。入国した時、私達の名前を書いた紙を持っていた男が笑顔で現れた。帰りもまたドルフィンのお使いで私達が無事通過するのを確認しに来たのだろうか。二万円もトランスポート料ふんだくって肝心な所はサポート無しか、役立たずめ。でも嬉しい。緊張がほぐれる。彼の名は「イノセント（！）」という。不満をぶつけるように「現政権をどう思うか」とか「政府が変わったら、是非また来るよ」とか興奮して話す。誰も居ない大きなフロアの椅子でタバコを吸う。少し離れた所に円筒型の灰皿を取りに行ったシンヤが爆笑している。それには底が無くやたらと重い。掃除夫はそれをゴロンとどけて中のゴミを掃き取るのだろう。合理的だ。ここからは腐った「国」ではなく民間の飛行機「会社」が運営する文明社会だ。サービスが定価で買える世界だ。

はしゃいでいると向こうにもう一つ、関門があるように見える。どうせカフェで贅沢する現金も無いから、最後の最後までチェックを終えてしまおう、ということになり立ち上がる。ドアの前に女性が座っている。「俺の感触ではこの国の女性は男と違ってプライドが高いとみたね」と予言して突入。すんなり通れて「ほらな」と得意になる。進むと今度こそはホンモノのエックス線検査がある。今度は荷物をちゃんと機械に通している。女性の係員がボディチェックをする。虫眼鏡型検査器で身体じゅうを調べる。ピーと鳴ったので「ここにはお土産の五〇ナイラ札が一枚入っているだけだよ」と取り出すとそれを取り上げて、また同じポケットでピーピー鳴る。いや鳴らす。しつこいのでポケットの裏地をひっくり返して「何も入っていないよ」というと偉そうに「行ってよい」という。「行ってよい」じゃねーよ、と係員の手から五〇ナイラ札を取り返す。前言撤回だ。次は私の荷物を前に「早く開ける」と三人の男性係員がワクワクと待っている。鍵を外してデイバッグを開けると太鼓が眼につく。一瞬ウケを取れて「しめた」と思ったが敵はひるまず荷物を細かくあさりまくる。底の方に詰めておいたポ

ケットティッシュの束を見つけると、何故か三人とも大笑いをして「OK。フィニッシュ」。デイバッグのサイドポケットにウォークマンを入れていたことを後から思い出してホッとす。今度こそ搭乗ゲートのドアの前だ。椅子に座ってまたタバコを吸う。遠くに先程のエックス線検査が見える。警察がやってきて入ってくる人を引き止めている。対象は自国民らしい。ヤジウマ気分で見に行きたいが、ここまで来てトラブルも面倒だ。チェックを終えて動く歩道で前を通り過ぎるビジネスマン風の白人に「おめでとう」と手を叩いた。

空港の職員のオバチャンが何か言いながらやって来た。「航空カウンターで預けた荷物を見に行け」という。この初めて聞くシステムに戸惑い「何のために？」と聞くと、これ以上は無理の嫌悪感を表情に出して「チツ」と舌打ちして「エア・チケットを見せろ」という。見せると「あの階段を降りて預けた荷物をチェックしに行け」。シンヤに荷物番を頼み行ってみると確かに荷物の山が主人を待っていて、運び入れるカーゴを指定されるのを待っている。じゃ、航空カウンターでやったチェックは何だったんだ？などと考えながら荷物を捜す。無い。近くにいるゴツイおじさんに聞いてみると「これはアリタリア航空の荷物だよ、エチオピア航空は未だ」。やれやれ、と搭乗ゲート前に戻る。この時、棺桶がカーゴから運びだされるのを見た。大事そうに係員が八人位でライトバンに運び入れた。死んでも帰ってきたいほどの故郷だったのか。

一時間後、先程のオバチャンが「エチオピア航空の人は荷物を見に行け」と先程と同じ無愛想さで私達にいう。今度はシンヤと見に行くと太鼓の入った荷物はすぐに見つかった。カーゴを指定して係りの男に「太鼓が入っているんだ。上の方に積んでくれ」と頼むが「OK、OK」と愛想良かった男は何処かに行ってしまった、別の男達が私達の荷物を手荒に出したり入れたりしている。その度に「ひーっ」とか「ああああ」とか叫んでいると「荷物のチェックが終わったならサツサと帰れ」と何度怒られる。

九月六日（水曜）

午前〇時三五分 搭乗

やはり、もう一度ボディチェックと荷物チェックをされる。バイバイ、ナイジェリア。感傷よりは空港脱出の達成感が嬉しい。

午前七時五〇分 エチオピア到着（フライト時間五時間一五分）

両替屋が開くのを待って現地通貨「ビル」を作る。その金でビールを飲んで、サンドウィッチとドーナツと卵焼きの朝食を取って、コーヒーを飲んで、眠って、お土産を買って、六時間以上もある待ち時間を過ごす。安いチケットは辛い。熟睡するために眼に手拭いを巻いていたらシンヤが「頼むから外してくれ」という。誘拐されてきた様にも見えるのか、通る人が皆ジッと見つめて行くらしい。誘拐犯に見られるシンヤは可哀想だが、とにかく眠りたい。眠ってあまりに長い待ち時間を少しでも余分にやり過ぎたいのだ。行きと同じこのフロアで、行きはトイレさえ緊張したのに比べて別人のような余裕だ。

この空港のボディチェックは厳しくて、カーテンで仕切られた個室へ通されて（半ズボンの上からだ）股間に手を入れられ所謂「アリノトワタリ」を撫でられる。これは行きのチェックでもやられたので、別に検査官の趣味によるものではないはずだ。「ウヒヤヒヤヒヤ」とくすぐったがると検査官もワハハと笑いながら「OK」となる。

午後二時一五分 エチオピア発

午後九時四五分 ボンベイ着（フライト時間五時間）

帰りはナイジェリアの疲れを癒す目的で超豪華ホテルを予約してある。行きのような心配は無い。豪華過ぎてシャトルバスなどというものさえ無い。止むを得ず、貧乏臭いタクシーでタジマールホテルへ。さすがツインで一泊二五〇ドルのホテルだ。英国の植民地だったインドは豪華さと言うものを知っている。歴史ある建物の中に近代設備が控え目に、それでいて必要充分に導入されている。日本にバブルが十年続いたとしても、こういうものは作れないんじゃないか？。アフリカとのギャップのもあって、部屋に入りボーイが出ていった後、何故か勝利者のように二人で狂喜する。バスルームやクロック、窓の景色やソファなど、一つひとつ感動を発見しては報告し合う。絶妙な硬さの清潔なベッドで嬉しさにワクワクしながら二五〇ドルの元を取るべく食欲に寝る。

九月七日（木曜）

午前一一時 起床

ホテルの回りを散歩。インド門をぐるりと回って、嗅覚を頼りに繁華街へ。大衆食堂のような所でカレーやデザートを大量に食う。タバコを吸ったら突然クソがしたくなった。ホテルへ戻るには二〇分程かかる。微妙な選択だったが安全第一、食堂の便所で済ます。あんなにキレイなホテルに泊まりながら、こんな汚い便所を使うなんて悔しい。情けない気持ちで、形を取り戻しつつあるウンコを傍のバケツの濁った水で流す。

午後四時 ホテルに戻る。

中庭のプールサイドで椰子のジュースを飲み、くつろぐ。外の喧騒がウソのように静かなのに、夕方の海からの風だけは柔らかく吹く。プールにペンキを塗るおじさん達に申し訳ないほどリラックスしながら、ヨルバランドの日々を回想する。

ホテルに不似合いな私達は何度もルーム・キーの提示を求められたが、彼等の態度は職務に忠実という感じで、レゴスの連中のように職権を振りかざすという感じではない。この不愉快なチェックに対して、怒るどころか好感を持ってしまう自分に驚いた。



九月八日（金曜）

午前一時 タジマホール・ホテル、チェックアウト

早朝の町を走るアンバサダー（インドが植民地時代から生産し続けている車）をシンヤが妙に絶賛をする。後部座席やトラックの広さ、シンプルなメーター類、「インド人は嫌いだが、これは完成された理想に近い自動車」だそうだ。

午前五時五分 ボンベイ発

空港で余ったルピーを使うためスナックへ入ってチャイとミネラル・ウォーターを注文する。シンヤは「インド人嫌いだけれどチャイはすごく気に入った」そうだ。

キャセイパシフィックのキャビンとスチュワーデスが輝いて見える。さっきまで標準的だった客の大半を占めるインド人が、ここでは明らかに行儀悪い人達だ。シンヤの隣の通路を挟んだ席のオヤジのイビキときたらヘッドフォンのポリウムをフルにしてもやかましい。飯の時間だけピタリと起きて、食い終われば食器が片付けられる前にイビキをたてている。一度はおさまったシンヤのインド人批難が再び始まる。あまりロコツに毒づくので日本語ながら回りに悟られるのではないかと思う。イビキは飛行機が着陸するまで終わらなかった。

午後三時一五分 香港着（フライト時間七時間四〇分）

一時間で香港ドルを作り「痩せる石鹼」を買わなければならない。ロビーを走って入国審査の列に並ぶ。売店のおばさんに日本語で値段を言われてハツとする。

午後四時二〇分 香港発

出発ギリギリまで買い物をして飛行機に乗り込むとそこは日本だった。日本の女の子達がたくさんいる。朝日新聞がある。ビールを頼んだらキリンが出てきた。機内食に（旨くはないが）蕎麦が出る。私達はお互いの健康に関する情報交換のため食事中でもウンコの話をするのが普通になっている。これからは注意しなくてはいけない。

午後九時一〇分 東京着（フライト時間三時間五〇分）

香港帰りの客に交じっているアフリカ帰りの客が「生きて帰れたのが不思議なくらいですよ」と冗談をいうと若い税関職員は笑いながらアッサリと通してくれた。考えてみれば、どんな違法な物を買うにしてもナイジェリアへ行く必要はないだろう。ワシントン条約に違反するような物ならケニアや南アフリカを選ぶだろうし、ピストルや薬物なら東南アジアで間に合うだろう。交易を目的とする人が、リスクを背負ってまで行く理由がないのだろう。

スカイライナーは終わっていた。次の特急は四十五分後でこれよりは各駅停車の方が早いという。安いエアチケットは辛い。この長い長い旅行が「千住新橋」などという初めて降りる駅になろうとは。上野発、ヨルバ・ランド経由、千住新橋ゆき、終点です。

シュライン・レポート

さあ、いよいよだ。胸に江戸アケミのバッジをつけてホテルを出る。

薄暗いシュラインのまわりは不良黒人達で異様な雰囲気。入場するでもなく集まっている人ばかりは、シュラインの外へ洩れる演奏を聴くことが目的らしい。その中の一人が「へい、この男はアフリカの服を着てるぜ」と近づいてきて「店の中には危ない奴が一杯いるぜ。俺と一緒に入って守ってやるよ」と入場料をタカるが、身体中から強力なマリファナの匂いをさせて、ロレッツが回っていない。しばらく付きまどってきたがシュラインの灯が見える頃には消えていた。

入り口近くにも危なそうなのがタムろってはいるのであるが、その中で一番恐そうなのがシュラインのガードマン役の店員で、彼等はモメゴトにとっても機敏に反応する。「おお、また来たか」と握手を交わすことが心細い私達にとって効果的な周囲へのアピールだ。彼もまたその治安上の効果を理解しているのだろう。彼等は客が持ち込もうとするウォークマンを見つけると破壊してしまう、という話は複数の人から聞いた。録音機能の有無が言い訳になるのかどうかは知らない。日本のコンサートのように一時預かりではなく、ラゴスの空港のように没収でもなく、「壊す」というのがカツコイイ。フェラ・クティは客に緊

張感を持って生演奏を聞かせるため、レコード化した曲は演奏しない。当然、ライブの録音は許されない。最高のものはシュラインの中にだけある。

絵葉書になるような、シブい雰囲気のある窓口で一〇〇ナイラの入場料を払って中へ入る。フェラがやってくる何時間も前から演奏は始まっていて「ビースト・オブ・ノーネイション」「モンキーバナナ」「ウォーター・ノー・ゲット・エナミー」「ロフォ・ロフォ・ファイト」「アツプ・サイド・ダウン」といった過去の曲を楽しむ。シェウン・クティ（フェラの息子。十歳位）やフェミ・クティ（フェラの長男。日曜にここで演奏している）もヴォーカルをとるが、基本的にはフェラの盟友レカン・アニマシャウン（バリトン、MC）と、もう一人の若い片目のバリトン、リルワン（こいつがまた、めちやくちゃ、カッコイイ）がとる。歳の離れた二人だが、それぞれにバンドリーダーの風格がある。個性の強い各メンバーのクールな音、それがまとまって全体がウネリだす。

「つかあー、これだけでもサイコー」と聞き入っている東洋人の横をマリファナ売り、ゆで卵売りなどがウロウロする。きつき鼻から何か吸い込んでいた近くの客が今は頭を抱え込んでいる。

ツインベースの音質の違いやパートの振り分け、バスドラムと重なる太鼓、やはり低音へのこだわりはアフロビートの神様なのだが、そのこだわり方がPA（電気）頼りでない所がよい。この空間ではPAは生音の補助程度にしか機能していないように感じられる。いや、そんな音響の問題ではなく、ステージの迫力がPAの存在を忘れさせるというか、直接聞き手に迫って来るというか。これは渋谷の「屋根裏」や新宿「ロフト」で感じ、クアトロやインクステイックでは感じられなかった感覚。この、空き地を壁で囲みトタンの屋根を乗せただけの、音響が良いとは決していえない空間でそれが出来るのは、やはり演奏のパワーなんだろう、と勝手に納得する。

マリファナの間接喫煙で頭が少しポツとなってきた頃、何人もの女を引き連れながら、いよいよフェラ・クティ登場。演奏は強引に中止される。演奏の開始は残念ながら前に雑誌で読んだ「音合わせをしているような状態からいつの間にか曲になっっている」というものではなかった。私はこれを期待していた。「じゃがたら」の初期の頃を思い出したからだ。あのバンドが無かったら、レゴスの地を踏むことなんて無かったはず。

ステージの間近で生のフェラを見ると、嬉しさや感動を越えて、ただ恐ろしかった。彼は民主主義（デモクラシー）を「デモンストレーション・オブ・クレイジー」（狂気の実演）と批難する。昔の人は、すれ違っただけでお互いの力が判断できたよって戦争など起きなかった。ナイジェリアだけで言語も宗教も違う部族が二百五十もあるようなアフリカに「民主主義は通 shouldn't」と。確かに彼は近代に汚染された私でさえ、すくんでしまうほど恐かった。「C・O・B（カントリー・オブ・ベース）」でステージをニワトリのように歩き回る時、彼がこちらの方へ向かって来ると「どうか、こつちを見ないで欲しい」と願いながらも彼から眼を離すことが出来ない。私はこの日、彼に「ニワトリ歩き」の指導を受ける夢をみた。

当然どの曲も聴くのは初めてなのだけれど、「O・D・O・O（オーバーテイク・ダン・オーバーテイク・オーバーテイク）」にある仕掛けのブレイク（打楽器を徐々に重ねていき、段々音の厚みが増し盛り上がった所で突然、リズムをキープしたままギターやキーボードが打楽器と交代に入り、また段々音が重なって盛り上がっていく）が多用されていてシビれる。ホーンセクションのトランペットは高音域の計算されたミストーンを含むフレーズで頭を攪乱する。とても荒々しくCDでは決して味わえない迫力。傑作だと思う「アーミー・アレンジメント」をフェラが気に入らないという理由が理解できる気がする。有名プロデューサーによるそれは、実際の演奏に比べて、ザラザラとした質感や荒々しい緊張感、つまりは生の迫力に欠けているのだと思う。

「C・R・F・J・J（クリア・ロード・フォー・ジャガ・ジャガ）」ではフェラがコーラスとダンサーの中から4人を選びステージ両脇に2人づつを配し、中央のフェラにお尻を向けて踊らせる。この中から一人づつステージ中央に連れ出し性交する。本当にするわけじゃないけどフェラの指は相手の股間をまさぐったりする。そしてその指を美味しそうにしゃぶり、ニマアアと笑う。客がドツと盛り上がる。これを4人様々な体位で繰り返す。さすがに私の緊張もほぐれ、気になっていたフェラが捨てた煙草の吸い殻を勇気を出してステージの上に乗出しゲット。うれちい。フェラはステージの間、頻繁に煙草とマリファナを吸っては捨てる。煙草で良かった。持ち帰って家宝にできる。

土曜日にはフェラがああ有名な、巨大マリファナを吸うパフォーマンスが見られる。その前に執り行われる「儀式」を間近で見ることが出来た。「アーミー・アレンジメント」のジャケットにも使われたそれは、口外すると呪われそうな、厳粛な緊張感の中で始まる。張り詰めた空気の横でババはバチバチと私のカメラのシャッターをフラッシュ付きで押し続ける。この時だけはこの男の無神経さに感謝した。他人のふりをしていたら「フィルムが切れた。新しいのをよこせ」と私に話し掛けてきた。さりげなくフィルムを渡すと「入れ方が分らん」。彼がカメラを突き返したので周囲の視線が私に集まってしまう。

この儀式を終えてステージへ戻ると、仕事の後の一服とばかりにフランスパンのような巨大マリファナに火が点けられる。数秒かけて吸う息が先まで届き、火がボウツと大きくなり、フェラが煙を吐き出すと客席から拍手。そして当たり前のように、またあの「C・R・F・J・J」の性交パフォーマンスが始まるのだから充実している。まったく、このシユラインには世界に必要な全てが詰まっているようだ。自由、秩序、欲望、神秘。

「C・S・A・S（コンドーム・ステアウェイ・アンド・スキヤッター）」では客席からステージにコンドームが投げ込まれる。客席の両端はトタン屋根の無い、小便臭いが踊れるスペースになっている。豪華なリズムに身体を揺らしていると停電になってしまった。珍しいことではないらしく打楽器は怯まず演奏を続けている。客は消えてしまったキーボードのリフレインに歌詞をのせ「おーぼりやりや、おーぼまぼこ、おーぼりやりや、おーぼまぼみ」と歌っている。曲の中で歌われる歌詞ではないのだけれど、トーキングドラム文化の人達はフレーズだけで歌詞を理解してしまうのか。意味は「マ〇〇さん、ボクを殺さないで。マ〇〇さん、チンチンを殺さないで」だそう。

暗闇でステージが見えないので、星空を見ていたら「アフリカへ、ヨルバランドへ、やって来たんだ」という実感がジワジワと身体じゅうに広がって、ブルブルツときて、ワクワクして嬉しくなってきた。

十五分程度の停電の間に二人の男が寄ってきた。一人目の男はゆっくりとした、たどたどしい英語で「俺はオマエが好きだ。だから金くれ、何かくれ」といって顔を近づけてくる。「俺もオマエが好きなんだけれど、何も持っていないだよ」とポケットを叩いてみせた。二人目の男は「ハロー」と握手を求めてきて、私の右手を握った瞬間、彼の左手は私の右ポケットに入っていた。彼にも「何も持って無いよ」といって左のポケットも探らせる。イヌのように男がポケットを探っていると、タジュが小さい身体で男に文句を言い、ことが面倒になるかと心配した所で電気がついた。男は逃げるように立ち去り、音楽が再開して、高度な秩序が機能を回復した。